

千葉東南部ニュータウン24

—千葉市富岡古墳群・富岡古墳群B支群—

平成14年3月

都 市 基 盤 整 備 公 团

財団法人 千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン24

ちば　とみおか　とみおか
—千葉市富岡古墳群・富岡古墳群B支群—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第420集として、都市基盤整備公団の千葉東南部地区土地区画整理事業に伴って実施した千葉市富岡古墳群ほかの発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代と中世の遺物・遺構が検出され、この地域の古墳時代と中世の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土研究の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成14年3月25日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水新次

凡　例

- 1 本書は、都市基盤整備公団千葉地域支社による千葉東南部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県千葉市緑区富岡町181ほかに所在する富岡古墳群（遺跡コード201-117）、富岡古墳群B支群（遺跡コード201-122）である。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、都市基盤整備公団千葉地域支社の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、本文中「I-1 調査の経緯」に記載されている各職員が実施した。
- 5 本書の執筆・編集は、加藤正信が行った。
- 6 本書に掲載の遺構等の番号は、原則的には調査時に使用したものそのまま踏襲して使用している。
- 7 本書に使用した地形図等は以下のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1:25,000地形図 蘇我 を編集

第2図 日本住宅公団（当時）発行 1:2,500地形図 を縮小編集

図版1 富岡古墳群・同B支群航空写真 1972（昭和47）年 京葉測量株式会社撮影のものを使用

- 8 本書に使用した挿図等の表示は以下のとおりである。
 - 須恵器は実測図断面を黒く塗りつぶし
 - 赤色塗彩土器は塗彩部分を赤色で表示
 - 報告書内の方位はすべて座標北で表示している。
- 9 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育厅生涯学習部文化課、都市基盤整備公団、千葉市教育委員会の御指導、御協力を得た。

本文目次

Iはじめに	
1 調査の経緯	1
2 調査の方法・経過	1
3 遺跡の位置と周辺の遺跡、歴史的環境	4
II富岡古墳群	
1 概要	6
2 遺構・遺物	
(1) 1号墳	6
(2) 2号墳	9
(3) 3号墳	11
(4) 4号墳	14
(5) 5号墳	19
(6) 001土坑	20
(7) 石塔類	20
III富岡古墳群B支群	
1 概要	33
2 遺構・遺物	
(1) 1号墳	33
(2) 2号墳	36
IVまとめ	
1 古墳群について	37
2 石塔類について	37
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 富岡古墳群・同B支群及び周辺の遺跡	2	第9図 3号墳実測図・復元図	12
第2図 富岡古墳群・同B支群周辺地形図	3	第10図 3号墳土層断面図	13
第3図 富岡古墳群1～5号墳周辺地形図	6	第11図 3号墳出土遺物	14
第4図 1号墳実測図・復元図	7	第12図 4号墳実測図・復元図	15
第5図 1号墳土層断面図	8	第13図 4号墳土層断面図	16
第6図 2号墳実測図・復元図	9	第14図 4号墳出土遺物	17
第7図 2号墳出土遺物	9	第15図 5号墳実測図・復元図	18
第8図 2号墳土層断面図	10	第16図 5号墳出土遺物	19

第17図	001土坑	20	第26図	石塔類（7）	29
第18図	石塔類凡例	21	第27図	石塔類（8）	30
第19図	石塔類集積範囲	21	第28図	石塔類（9）	31
第20図	石塔類（1）	23	第29図	石塔類（10）	32
第21図	石塔類（2）	24	第30図	富岡古墳群B支群1号墳・2号墳周辺地形 図	33
第22図	石塔類（3）	25	第31図	1号墳実測図	34
第23図	石塔類（4）	26	第32図	2号墳実測図	35
第24図	石塔類（5）	27				
第25図	石塔類（6）	28				

表 目 次

第1表 石塔類計測表（1）.....22 第2表 石塔類計測表（2）.....22

図 版 目 次

図版 1	富岡古墳群・同B支群航空写真	図版 6	4号墳土層断面、4号墳航空写真、 5号墳調査前
図版 2	1号墳調査前、1号墳全景、 1号墳土層断面	図版 7	5号墳全景、1号墳～4号墳全景
図版 3	1号墳航空写真、2号墳調査前、 2号墳土層断面	図版 8	出土遺物、石塔類出土状況
図版 4	2号墳航空写真、3号墳調査前、 3号墳土層断面	図版 9	石塔類（1）
図版 5	3号墳航空写真、4号墳調査前（出羽三山 供養塚）、4号墳調査前（石碑類撤去後）	図版10	石塔類（2）
		図版11	石塔類（3）
		図版12	B支群1号墳遠景、B支群2号墳遠景、 B支群2号墳土層断面

I はじめに

1 調査の経緯

都市基盤整備公団による千葉東南部地区土地区画整理事業に伴い、対象区域内に所在する埋蔵文化財の発掘調査による記録保存を行うこととなり、昭和49年から当センターが委託を受け、発掘調査を今まで継続して実施してきた。整理作業についても実施されており、その成果としてすでに調査報告書が23冊刊行されてきている¹⁾。今回報告する富岡古墳群及び富岡古墳群B支群（以下、単にB支群と記述）も、こうした経緯のもとで調査された遺跡の一つである。ただし、本遺跡は当初は富岡古墳群として古墳5基の存在だけが知られていたが、それ以外にも近接地に古墳2基が存在することが造成工事中に確認され、富岡古墳群のB支群として急速調査を実施することとなった。

発掘調査は、当初から存在が知られていた富岡古墳群では古墳5基の調査、造成工事中に新たに発見されたB支群については古墳2基の調査が実施された。調査期間は用地買収の都合もあり、買収の終了した部分を先行して調査することとなり、平成8年度は平成8年11月1日から平成9年1月22日までの期間に5号墳の調査を実施し、平成9年度には新たに発見されたB支群1号墳・2号墳の調査を、平成9年9月8日から10月21日までの期間に実施した。平成10年度には用地買収の遅れていた部分の買収が終わり、平成10年9月1日から12月25日までの期間に1号墳から4号墳の4基の古墳の調査を実施した。

整理作業は平成13年度に実施し、記録整理、遺物の水洗・注記から原稿執筆・印刷・刊行までを行った。発掘調査及び整理作業の組織・担当者は以下のとおりである。

発掘作業 平成8年度 組織 中央調査事務所長 藤崎芳樹

担当者 調査室長 栗田則久、主任技師 福田 誠

平成9年度 組織 中央調査事務所長 藤崎芳樹

担当者 主任技師 四柳 隆

平成10年度 組織 中央調査事務所長 石田廣美

担当者 研究員 小原邦夫、主任技師 石倉亮治・廣瀬和之、四柳 隆

整理作業 平成13年度 組織 中央調査事務所長 三浦和信

担当者 副所長 加藤正信

内容 記録整理～刊行

重点遺跡整理促進事業

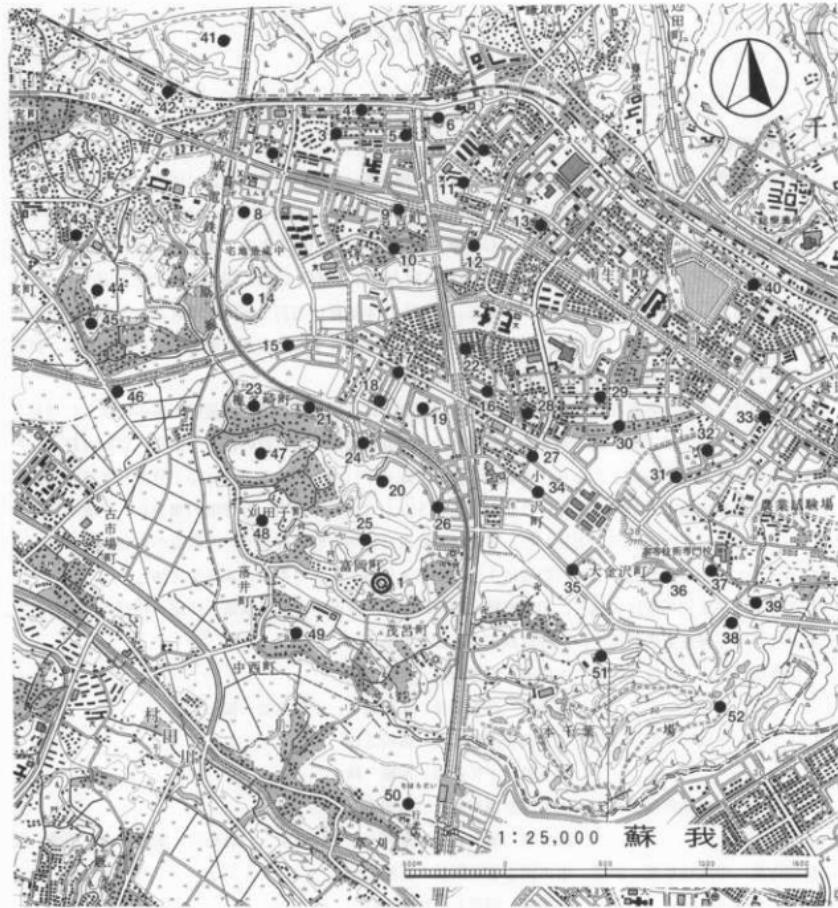
組織 資料部長 斎木 勝、副部長兼整理課長 古内 茂

担当者 上席研究員 蜂屋孝之、整理技術員 平井真紀子

内容 実測の一部・トレースの一部・写真撮影の一部

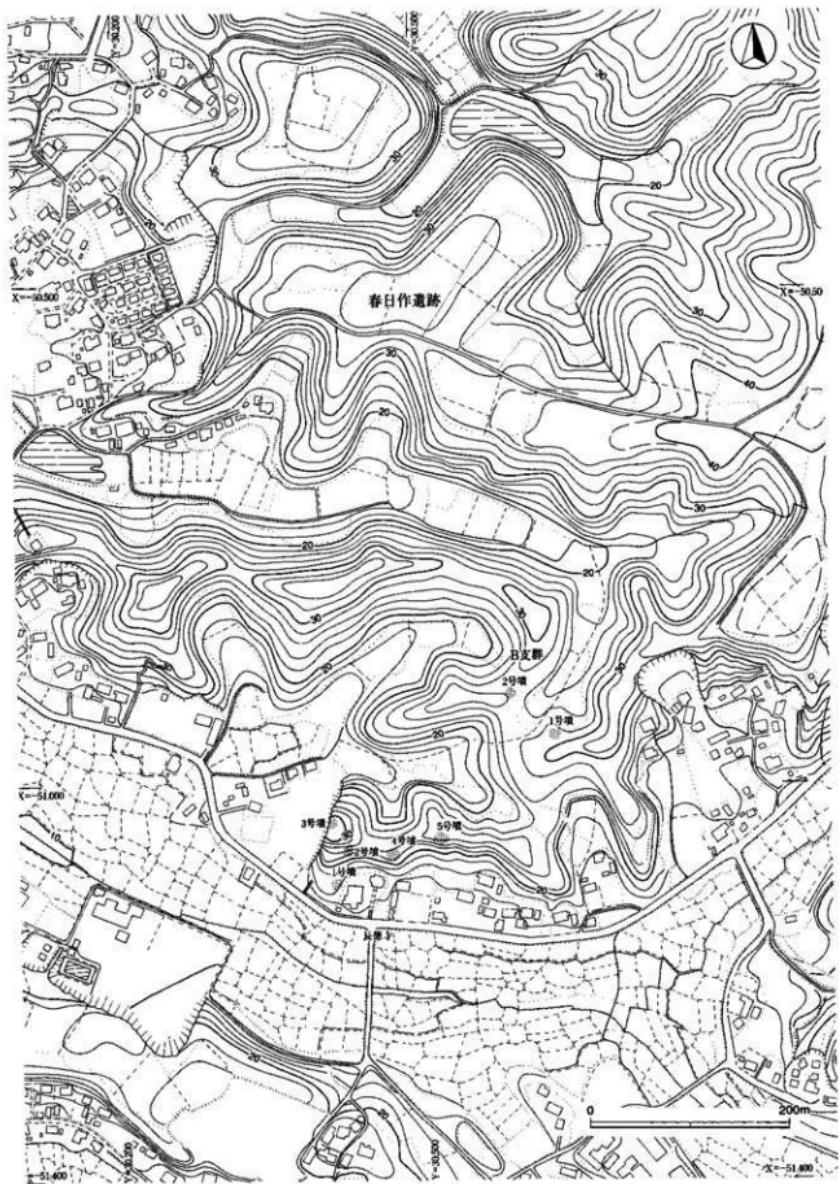
2 調査の方法・経過

本遺跡の発掘調査は、平成8年度・9年度・10年度の3年度にわたって実施した。遺跡全体を包括する



- 1 富岡古墳群・同B支群 2 有吉遺跡 3 高沢遺跡 4 生浜古墳群 5 南二重堀遺跡 6 錬取台遺跡
 7 錬取遺跡 8 上赤塚貝塚・古墳群 9 有吉南遺跡 10 有吉城跡 11 有吉北貝塚 12 有吉南貝塚 13 馬ノ口遺跡 14 城ノ台遺跡 15 椎名崎遺跡 16 椎名崎古墳群A支群 17 狐塚古墳群 18 人形塚古墳 19 椎名崎古墳群B支群 20 椎名崎古墳群C支群 21 椎名神社遺跡 22 木戸作遺跡 23 伯父名台遺跡 24 今台遺跡 25 春日作遺跡 26 神明社裏遺跡 27 小金沢古墳群 28 小金沢貝塚 29 六通遺跡 30 六通貝塚 31 六通金山遺跡 32 六通神社南遺跡 33 白鳥台遺跡 34 御坂台遺跡 35 ムコアラク遺跡 36 太田法師遺跡 37 大鶴野北遺跡 38 パクチ穴遺跡 39 大鶴野南貝塚 40 小谷貝塚 41 種ヶ谷津遺跡 42 大道遺跡 43 大覺寺山古墳 44 森台遺跡 45 古城小弓 46 神門遺跡 47 刘田子台遺跡 48 立台遺跡 49 杉ノ台遺跡 50 草刈遺跡群 51 左作瓦窯跡 52 油戸遺跡

第1図 富岡古墳群・同B支群及び周辺の遺跡



第2図 富岡古墳群・同B支群周辺地形図

ように国土地理院の国家座標系（第IX座標系）を基準として発掘区を設定した。原則として一辺20mの大グリッドを基本に設定し、さらにその大グリッドを一辺2mの小グリッドに分割し、大グリッドの北西端の小グリッドを00とし、東へ向かって01, 02, 03, …08, 09とし、南へ向かって10, 20, 30, …80, 90とし計100の小グリッドに分割して調査区を設定した。ただしB支群は、古墳の周辺に上記の国家座標に沿った基本杭を設定し、それに杭番号を付して測量の原点とした。

今回報告する富岡古墳群は、千葉市緑区富岡町181ほかに所在し、調査対象面積は富岡古墳群6,700m²、B支群1,200m²の合計7,900m²（平成8年度700m²、平成9年度1,200m²、平成10年度6,000m²）となり、先述のように、調査は用地買収の都合から、3年度にわたり、8年度に1基、9年度にB支群2基、10年度に4基の計7基の調査となった。

墳丘と見られる部分に、原則的に土層観察用のベルトを十字に設定し土層観察をおこなった。一部の古墳では、前方後円墳の可能性が窺われ、キの字状にベルトを設定したものもある。古墳の一部は、近世以降の出羽三山の供養塚として石碑が建てられ再利用されていたので、石碑等の撤去を地権者側で行った後に調査を実施した。全体的には、盛土の遺存は不良ですぐに地山が露呈し、形状の窺えるような明晰な墳丘が確認された古墳はなかった。また、周溝もごくわずかの部分しか確認できず、主体部に至ってはすべての古墳で検出されなかった。遺物も遺存した周溝内を中心に少量検出されたのみであった。

下層の旧石器時代の調査は、8年度の調査の際に、地山層に通常の関東ローム層が確認されなかつたことから調査は不要とされ、次年度以降の調査の際も、関東ローム層の存在しない地山の状況を確認した上で調査は不要と判断された。

3 遺跡の位置と周辺の遺跡、歴史的環境（第1・2図、図版1）

富岡古墳群は、房総半島の西北部東京湾に流入する村田川の沖積低地に近い台地上に位置する。村田川の開拓谷が台地に複雑に入り込むその一支谷に南面し、現在の流路からは直線距離で約1.3km離れている。村田川の沖積平野は、河口近くでは海岸低地と一体となり、広大な面積を持つが、遺跡の所在する付近からは急に台地に囲まれて細長い河川の浸食谷となり、その面積を減ずる。遺跡の前面には、より低平な台地が東側から延びてきており、沖積地から見ると遺跡は2番目の台地上ということが出来る。遺跡の所在する台地は、基部が北東方向に延びて広がり、数多くの遺跡の所在する比較的広大な台地に連なる。遺跡からは村田川の沖積低地が谷を通して西方に広がるのが望まれる。遺跡の標高は約30m程で、台地の奥へ行くにつれ標高は緩やかに上昇し、最高約40m程になる。

遺跡の北側に広がる台地上には、数多くの遺跡が所在し、東南部地区の区画整理事業に伴って調査され、今まで多くの報告書が刊行されている。遺跡の時代は、旧石器時代から中近世に至るまで長期にわたりその数も多く確認されているが、一見すると弥生時代の遺跡は非常に少ない。事業に伴う発掘調査はほぼ収束の時期を迎えており、未報告の遺跡も多く、調査された遺跡のすべてが解明されたわけではないので、詳しく検討することは出来ないが、今までの調査成果については、少しづつ紹介されてきている。ここでは東南部地区内を主として古墳時代の集落・古墳の一部と中世を見るにとどめたい。

古墳時代の遺跡は、ほぼ全域に広く分布し前期の集落が、南二重堀遺跡³、馬ノ口遺跡⁴、城ノ台遺跡⁵等で検出され、前期の古墳も馬ノ口遺跡で検出されている。古墳時代中期の集落は、南二重堀遺跡、鎌取場台遺跡⁶、鎌取遺跡⁷等で検出されている。古墳は上赤塚古墳群⁸、上赤塚1号墳⁹、狐塚古墳¹⁰、椎名崎古墳

群¹⁰等で検出されている。後期の集落は、ほぼ全域にわたって分布し、比較的規模の大きな集落が営まれ、さらに奈良・平安時代の集落へと続く遺跡が多い。古墳は、後期の小円墳を中心とした群集墳が多くなり、椎名崎古墳群（A・B・C支群）に代表される古墳群があげられる。古墳の墳形は、前方後円墳、円墳、方墳、帆立貝式古墳などバラエティに富んでその総数も多い。

中世以降の遺跡については、東南部地区内では有吉城跡¹¹からは土坑や墓坑、城ノ台遺跡、有吉北貝塚¹²からは、土坑墓・火葬墓・台地整形区画等、ムコアラク遺跡¹³からは城郭状の整形区画などが検出されている。また周辺の古墳群の墳丘を塚に改変した例は數多く調査されている。

調査遺跡に隣接して南側の台地と谷津の境の部分に富岡山長徳寺が所在する¹⁴。調査区と南側の長徳寺の境内とは表裏一体で、調査区は長徳寺の裏山に位置し、後背地の墓地・供養地として用いられてきていることは想像に難くない。今回の調査地外には、集落の忠靈塔、調査区内には出羽三山供養塚が所在し、長徳寺との密接な関連が想定される。今回検出された石塔類も、当然長徳寺の裏山に伴う遺物が後世に集積されたものであろう。長徳寺は県指定文化財の木造薬師如来座像と梵鐘を所蔵し、木造薬師如来は半丈六の13世紀頃の作と推定されている。一方、梵鐘はやや小振りな総高約86cmのもので、銘文に「總州路菩生莊中須賀縣日吉山王宮鐘一口」、さらに追刻で宝徳元（1449）年の紀年名と共に天文14（1545）年下總千葉庄椎名富岡山長福寺に転じたことが記されている。長福寺は現長徳寺の旧名称であることや、指定文化財の年代から見ても、石塔類の時期と薬師如来座像・梵鐘には関連がありそうである。

- 注1 県千葉県文化財センター 2001 「千葉東南部ニュータウン23 - 千葉市太田法師遺跡2（縄文時代以降）-」に集成されている。
- 2 県千葉県文化財センター 1983 「千葉東南部ニュータウン12 - 南二重堀遺跡 -」
- 3 県千葉県文化財センター 1984 「千葉東南部ニュータウン15 - 馬ノ口遺跡、有吉城跡、白鳥台遺跡 -」
- 4 県千葉県文化財センター 1985~1995年調査 未報告
- 5 県千葉県文化財センター 1999 「千葉東南部ニュータウン22 - 鎌取場台遺跡 -」
- 6 県千葉県文化財センター 1993 「千葉東南部ニュータウン18 - 鎌取遺跡 -」
- 7 県千葉県文化財センター 1994~1996年調査 未報告
- 8 県千葉県文化財センター 1982 「千葉東南部ニュータウン13 - 上赤塚1号墳・狐塚古墳群 -」
- 9 8に同じ
- 10 県千葉県都公社 1975 「千葉東南部ニュータウン1 - 椎名崎古墳群（第1次）-」 他は未報告
- 11 3に同じ 他は未報告
- 12 県千葉県文化財センター 1998 「千葉東南部ニュータウン19 - 千葉市有吉北貝塚1（旧石器・縄文時代）-」
- 13 県千葉県文化財センター 1979 「千葉東南部ニュータウン8 - ムコアラク遺跡・小金沢古墳群 -」 他は未報告
- 14 以下は、千葉県文化財保護協会 1989 「千葉県の文化財」ほかを参考にした。

II 富岡古墳群

1 概要（第3図、図版7）

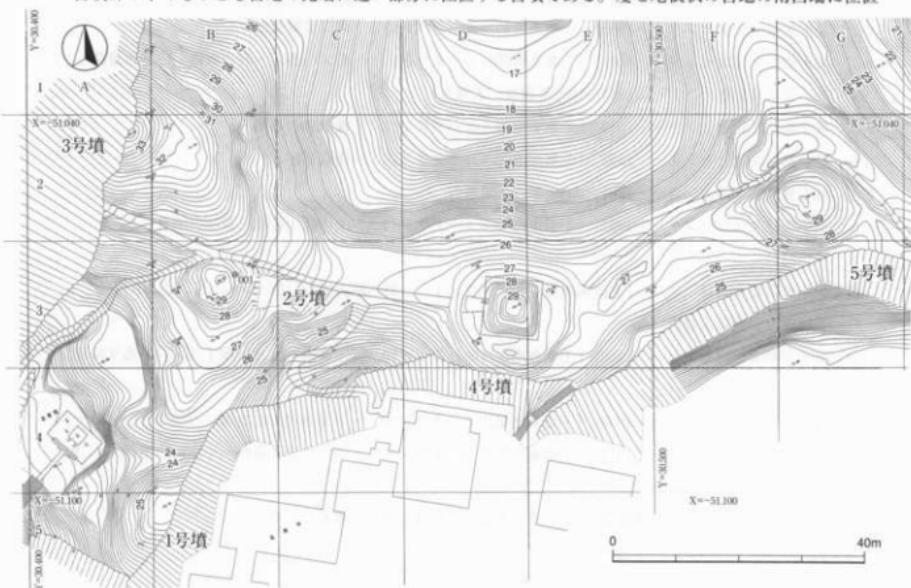
本古墳群の調査は、平成8年度と10年度の2年度にわたって実施した。用地買収の都合で平成8年度は5号墳1基を調査し、用地の買収できた10年度に残りの1号墳から4号墳までの4基の調査を実施した。本古墳群は、全数5基の古墳群で所在する台地上は、痩せ尾根状に近い平坦地となっている。そのため、東南部地区一の大古墳群である椎名崎古墳群の立地する台地上とは異なり、平坦な台地上に後期古墳が群集する様な状況とは異なる。また古墳の時期も後期だけではなく、台地上に単独で所在する様な前期古墳も認められた。4号墳は後に供養塚に大きく改変されていた。全般に痩せ尾根上に位置する古墳群のため、本来の墳丘盛土の高さや、周溝の掘り込みが少なく構築の際の加工の程度が少なく、さらに平坦地より風雨による浸食が著しく、古墳の墳丘・周溝の遺存状況は非常に不良であった。そのため古墳であった痕跡をほとんど確認できない古墳もあり、本来の規模、状況がほとんど窺えないものもあった。

2 遺構・遺物

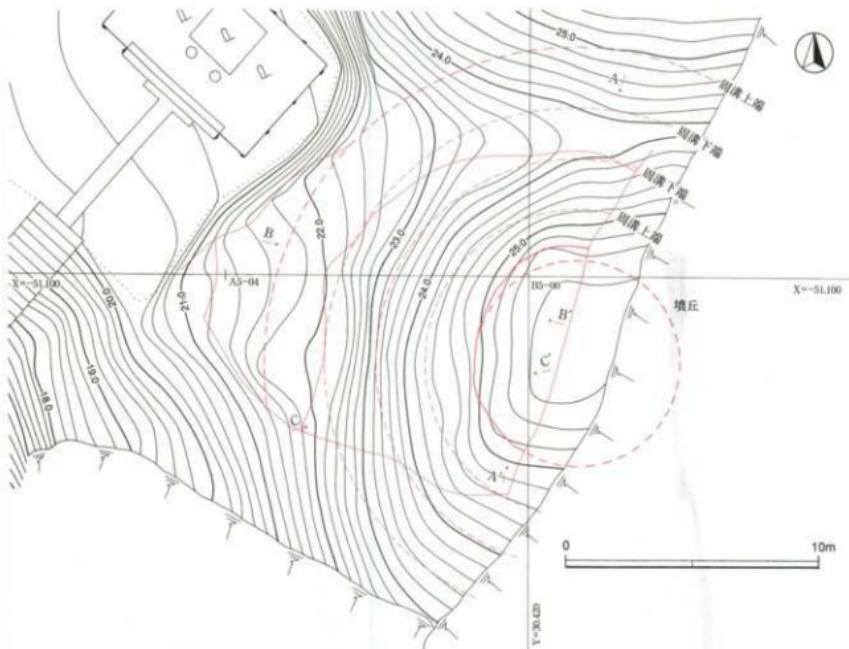
（1）1号墳（第4・5図、図版2・3）

①遺構

古墳群の中でもっとも台地の先端に近い部分に位置する古墳である。痩せ尾根状の台地の南西端に位置



第3図 富岡古墳群1～5号墳周辺地形図



第4図 1号墳実測図・復元図

し、台地先端部が調査時には掘削されており、古墳の西側約半分程度しか遺存していなかった。東側の削平面下には長徳寺が所在し、比較的古くから台地が掘削されていたとみられる。

墳丘は今回の調査の中では、比較的遺存が良い方で、墳丘の遺存する高さは0.7m～1.3mを測る。本来の台地の起伏があり、それに墳丘の高さが加わるので見かけの高さは3.5m～4mに近く非常に高さのある古墳に見える。墳丘はほぼ東半分が削平され、台地下まで崖になっており安全上のために崖の部分までは調査が出来ず、掘り残さざるを得ない部分があった。墳丘は最高標高25.6mで墳頂付近がやや平坦になって少しの広がりを持っている。墳丘の広がりは直径約8mの半円形の広さである。盛土は暗褐色の砂層で、墳丘周辺では厚さ0.7m前後、中央では旧表土がやや抉るように窪んでおり、厚さ最大で1.3mの部分がある。旧表土の遺存する縁辺では、盛土が周辺の自然の傾斜面に流出している。縁辺から周間に幅約3m～4mにわたって傾斜面が続き、1.5m～2mの比高差で周溝の痕跡とみられるやや平坦な部分に至る。北側では一部が道路状にやや窪むが、周溝底が山道として利用されたこともあったかもしれない。平坦な部分は全周で明瞭ではなく、南側の一部と北側の一部に認められた程度で、土壠断面でも明瞭ではなかった。

墳丘を復元すると、直径8mの円形で、その周囲に約2mの自然傾斜がありその外側から周溝の掘り込みが始まる。周溝は底面まで約2mあり、深さ1mほどで外側の周溝の立ち上がりは極めて不明瞭である。

埋葬主体部や周溝内の土坑のような掘り込みは一切検出されず、遺物も時期が判断できるようなものが出土しなかったため遺構の時期の判断が出来ない。

②遺物

図示できるような遺物は出土しなかった。

第5图 1号壤土层断面图





第6図 2号墳実測図・復元図

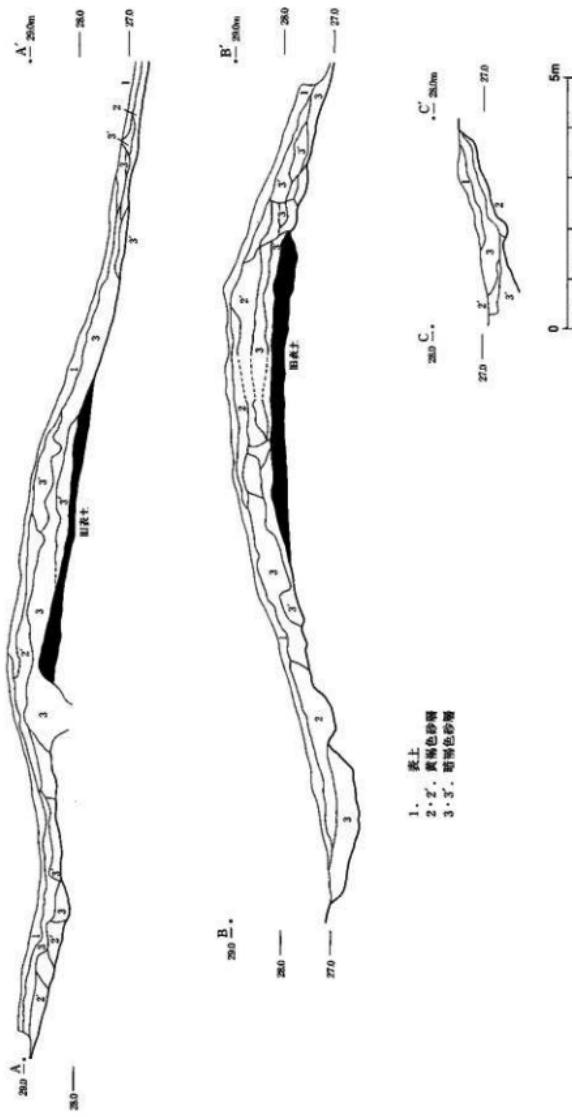


第7図 2号墳出土遺物

(2) 2号墳 (第6~8図、図版3・4・8)

①遺構

痩せ尾根上に位置する古墳で、北側約20mに3号墳、南側に約40mには1号墳が所在する。南東側は削平による崖になっていて、崖下には長徳寺が所在する。さらに東側約40mには4号墳である、出羽三山供養塚が位置する。本古墳脇には山道があり、通行に供されており、本来の墳丘を一部損ねている可能性が窺われた。墳丘の最高所は標高29.4mを測り、周溝痕と見られるやや平坦な部分の高さは27.2mほどで、周囲からの見かけの高さは、2.4mほどの高さになる。北側はすぐにやや登りの自然傾斜になり、3号墳へと続く。3号墳頂から見た2号墳は見下ろすようになり、墳頂間の比高差は約4.6mもあり、3号墳から見ると2号墳は明らかに下位に位置している。墳頂は、平坦な部分が4m~5mの円形に広がり、そこから緩やかに下り傾斜となり、約1.5m下ると周溝状の幅2mほどの平坦部にいたる。



第8图 2号填土剖面图

墳丘は表土を除去すると、暗褐色の砂層が見られ墳丘の盛土とみられる。盛土の最大厚さは、0.7m～0.8mほどでその下には、旧表土と見られる黒色がかかった砂質土が厚さ約0.3m、広さ5m～6mに分布する。旧表土の部分は傾斜もやや平坦気味で、掘り残されたように窓われ、その外側は地山を含めてなだらかに周囲へ傾斜して下り、地山を削平して円形状の盛り上がりを作ったように見受けられる。墳頂部中心から7m～8m離れて下った部分には周溝状の窪みがあり、幅2m～3mの部分が窪んでいる。特に明瞭に溝を掘り込んで作ったとは断言しにくく、一部は山道として用いられていたこともあり、本来周溝であった部分の窪みに山道が自然に作られたとみられる。土層断面の観察で一部にやや溝状に窪み土砂が堆積したような部分が、その周溝の痕跡と思われる。

墳丘、周溝内からは古墳に伴う主体部・土坑などは検出できなかった。

遺存状況の悪いなかで、古墳としての形状を復元すると墳丘の径約7mの円形で、周溝の内径約12m、周溝幅4m～5m程度で外径は自然傾斜に隠れてしまって確認できない状態の古墳を推定復元できるだろう。

②遺物

1は、一括採集された遺物で須恵器の杯蓋の破片である。外面に一部軸が付着し、復元径15.8cm、高さ2.6cmとなる。

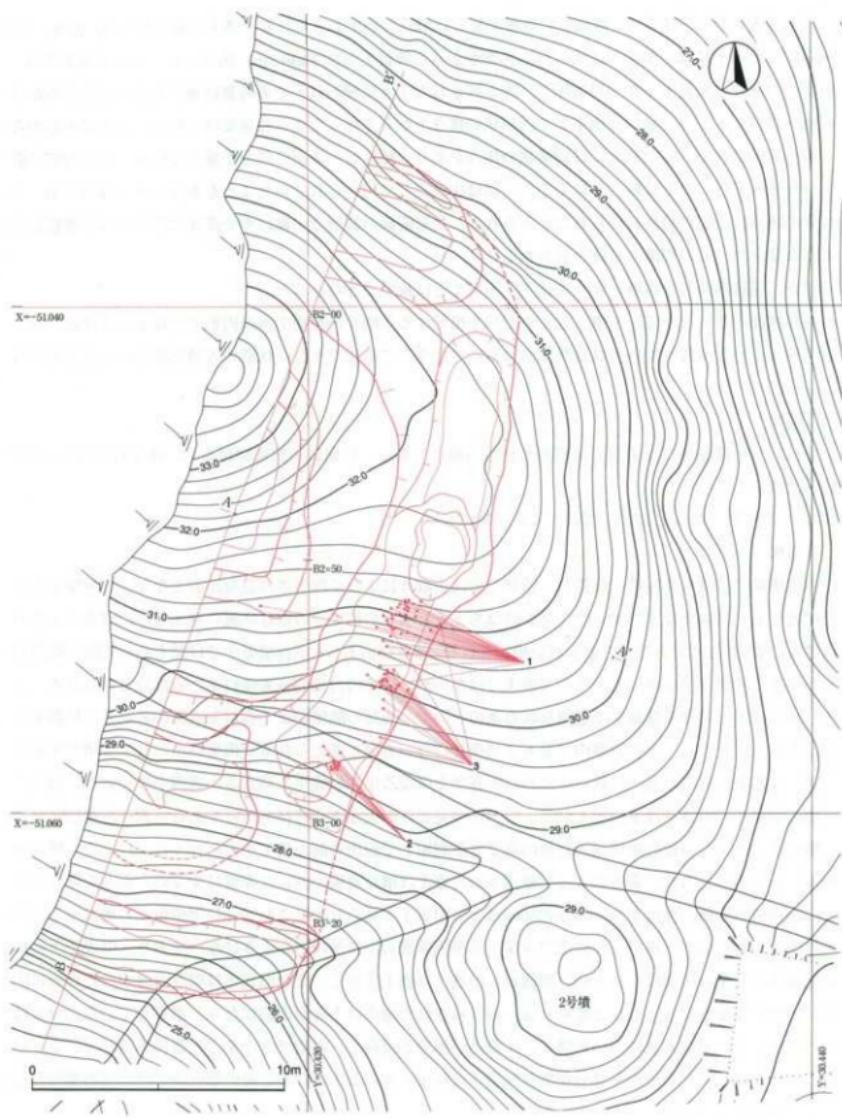
(3) 3号墳 (第9～11図、図版4・5・8)

①遺構

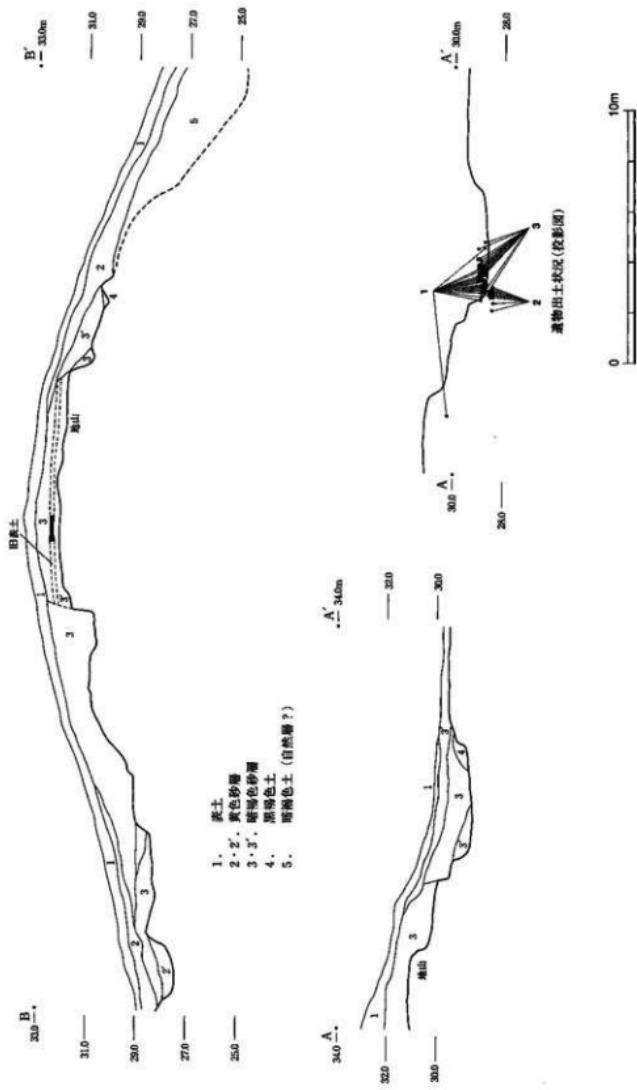
本古墳群では最も北西端に位置し、西側半分は土取りによって削平され急な崖面となり、危険防止のため崖近くまでは調査できなかった。見かけはちょうど墳丘の約半分の遺存状況に見えるが、調査できたのは墳丘の東側約1/3であろう。最も高い墳頂部は標高約33.8mあり、本古墳群中では最も高く周囲の眺望がよい。また西側を削平されているので確実ではないが、本来の台地の最先端にあたる部分と見られる。この台地は村田川の沖積低地を望む樹枝状台地の一つで、西側の眺望がよく台地先端部の最高所に位置すると見られることから、本古墳群内で最も立地条件の良い古墳と考えられる。南東25mには2号墳が所在するが、3号墳から見ると1段低いところに所在する単なる小さな盛土に見える。周囲から見ると、独立した墳丘で見かけの高さは4m近くあり、なおかつ見かけの大きさも直径30m近くある立派な古墳に見える。

墳丘は、本来の台地の先端部の自然の高まりを利用して地山の削り出しを主に行うことによって墳丘を構築したものと見られ、調査によって確認された盛土は墳丘規模の割には非常に少ない。表土を除去すると、暗褐色の砂層が検出され、厚さ約50cmほどで旧表土と見られる厚さ約20cmの黒褐色土の層に至る。黒褐色土は土層断面の一部でしか確認できず、暗褐色砂層の中に溶け込むようになっており、旧表土下の暗褐色砂層と明瞭な区別はしにくい。周囲からの盛土は表土に近く、また旧表土は厚さが薄かったために明瞭に判別できなくなったものと見られる。掘り残された地山は上面が平坦になり、遺存していた部分では広さ7m×2mの長方形に近い形態で、1番高い部分が遺存し、調査できなかった西側へ続いている。そこからやや傾斜した平坦な部分があり、広さは15m×5mと広くなる。その部分をテラス状の部分と見ることが出来るだろう。

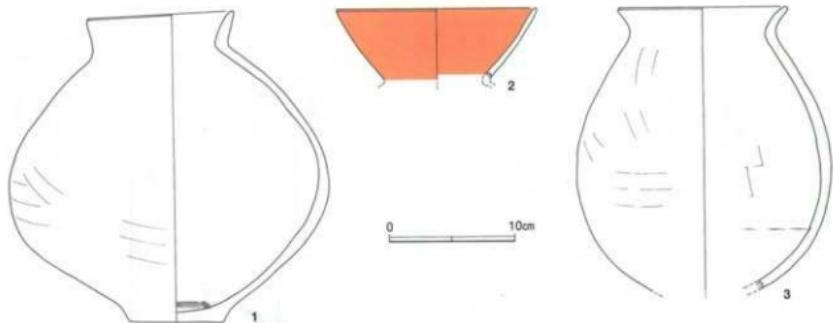
その外側には溝が認められ、幅は場所により差が大きく最大11m、最小で4mである。これを本古墳の周溝とみると、周溝の内側・外側の形状や、掘り残された地山の形状から見ると北北東～南南西方向とそれに直交する方形の一部と見ることができる。調査できた東側に当たる周溝外辺は直線に近く、長さは最



第9図 3号墳実測図・復元図



第10图 3号出土断面图



第11図 3号墳出土遺物

長で30mを超え、両端部は緩やかに丸みを持ってほぼ直角に西側へ曲がり、直線的に西へ5m～7mほど延びて調査区外へ続く。東側の周溝内辺は、外辺よりはやや丸みが強いが、ほぼ直線的に伸び両端で緩やかに丸みを持って折れ曲がり西側へ延びる。周溝の折れ曲がる北側と、南側端の部分は周溝がやや浅く、意識的に浅く掘り残したものと見られる。南側の辺は最も幅が広く、見た目には最大幅11mもあるが、溝の掘り方をみると、北側に幅広く深い溝と、南端では狭く細い溝が掘り込まれており、本来は2条の溝が別々に掘り込まれていたと見ることができ、北側の広いものが本古墳の本来の周溝で、南側のものは別の溝と考える方がよいのではないかろうか。そうすると南側周溝は、幅約7m～8mとなり、南北方向の外辺長は約30mとなる。周溝は逆台形に近い断面に掘り込まれ、周溝の覆土は一部に黒褐色土が認められる。本古墳の形状は、全体を調査したのではないので確定しがたいが、調査した範囲で求めると、周溝の外径で約30m、内径で18m、墳丘径約15m、墳丘の高さ4mほどの方墳と考えられる。また主軸方向を決定するのにも同様に難があるが、概略でN-21°-Eとなる。

②遺物

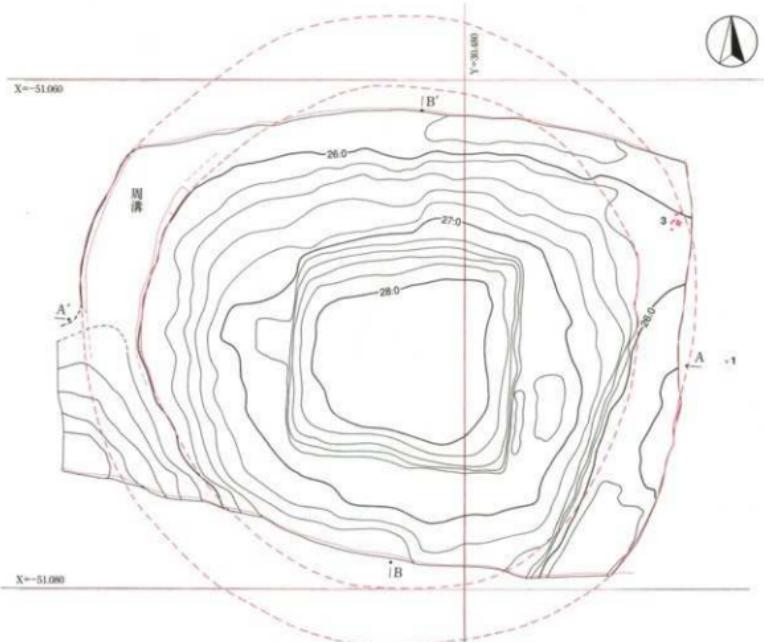
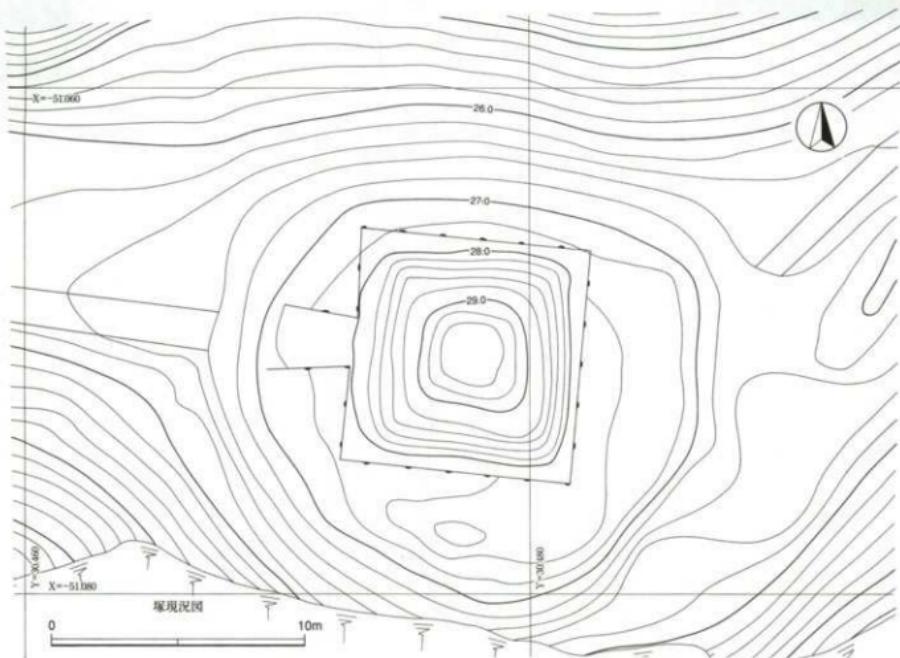
遺物は図示できたのは3点のみであるが、それ以外にも多くの破片が周溝内を主として出土している。それらは、点数が多いものの接合せず小破片がほとんどであった。出土位置は墳丘から見ると周溝の東側の辺にあたり、ほぼ中央部、周溝底面に近く多くの破片が散乱していたものが接合している。1、2、3共に土師器の壺で、1は比較的遺存がよく、胴部が算盤玉状に近く大きくふくらんでいる。口径11.4cm、底径7.4cm、器高24.6cmを測る。2は口縁で、復元口径16.0cm、内外面共に赤彩が施されている。3は1よりは胴部のふくらみが少なく、復元口径は13.0cmとなる。

(4) 4号墳（第12～14図、図版5・6・8）

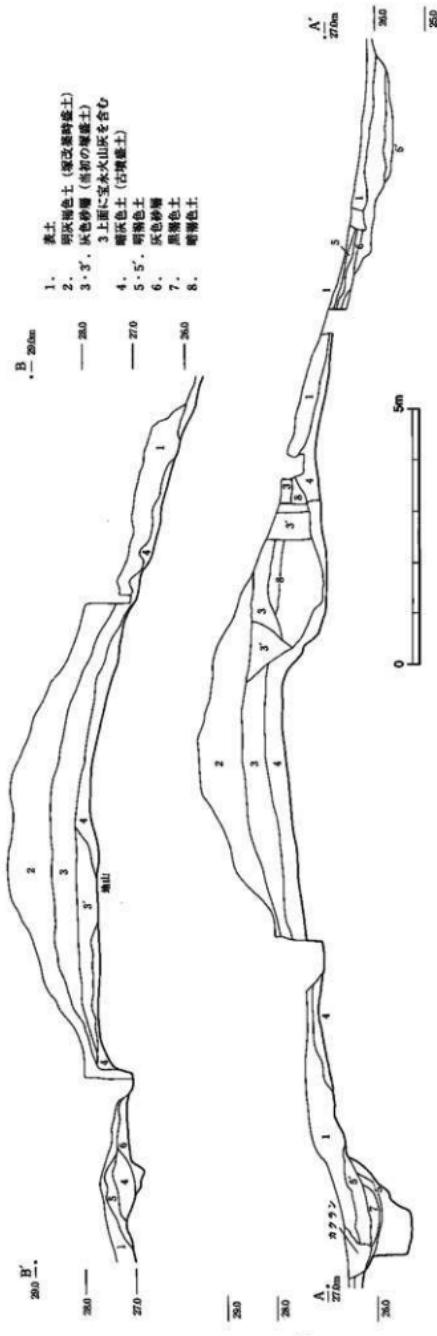
①遺構

調査着手時まで出羽三山の供養塚として地元の信仰を集めていた塚である。塚上には出羽三山に関連する石碑類が建てられており、地権者側で塚の移転・撤去をおこなった上で調査を開始することになり、塚上の石碑・盛土の土留め石積みを撤去してからの調査となつた。そのため塚の頂上の盛土の状態はやや損なわれ、石積みの撤去のために盛土の一部が掘り下げられることになった。

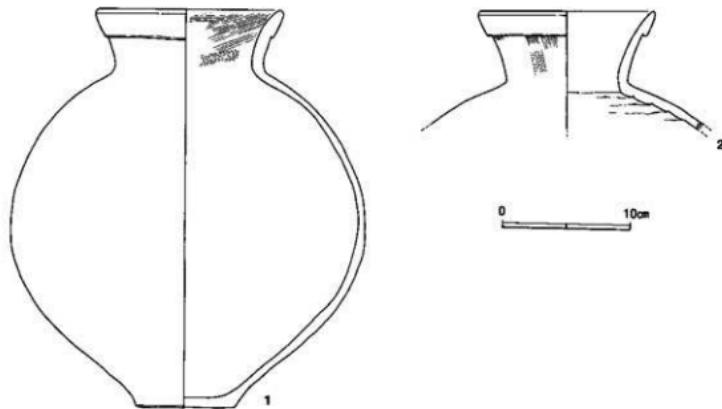
供養塚としては、出羽三山（月山、湯殿山、羽黒山）の石碑類が頂上に建てられた、3段築成の塚で1段目は盛土の土留めのために石積みが組まれていた。上側二段は自然の盛土の状態で、平坦面と傾斜面が



第12図 4号墳実測図・復元図



第13図 4号填土層断面図



第14図 4号墳出土遺物

築成されていた。1段目の辺長は9.2m、2段目は約6m、3段目は約2.5mで、総高は約2.5mである。平面形はほぼ正方形で、東西南北に近く辺を向け、塚への登り口となる階段状の部分は、西辺の中央に認められた。塚は昭和40年代に盛土が修復され、その際に1段目の石積みがなされたという地元の方の話から、それ以前の塚を修復したことが知られる。土層断面の観察でも非常に新しい盛土と、その下に富士山の宝永火山灰を含んだ盛土層が認められた。

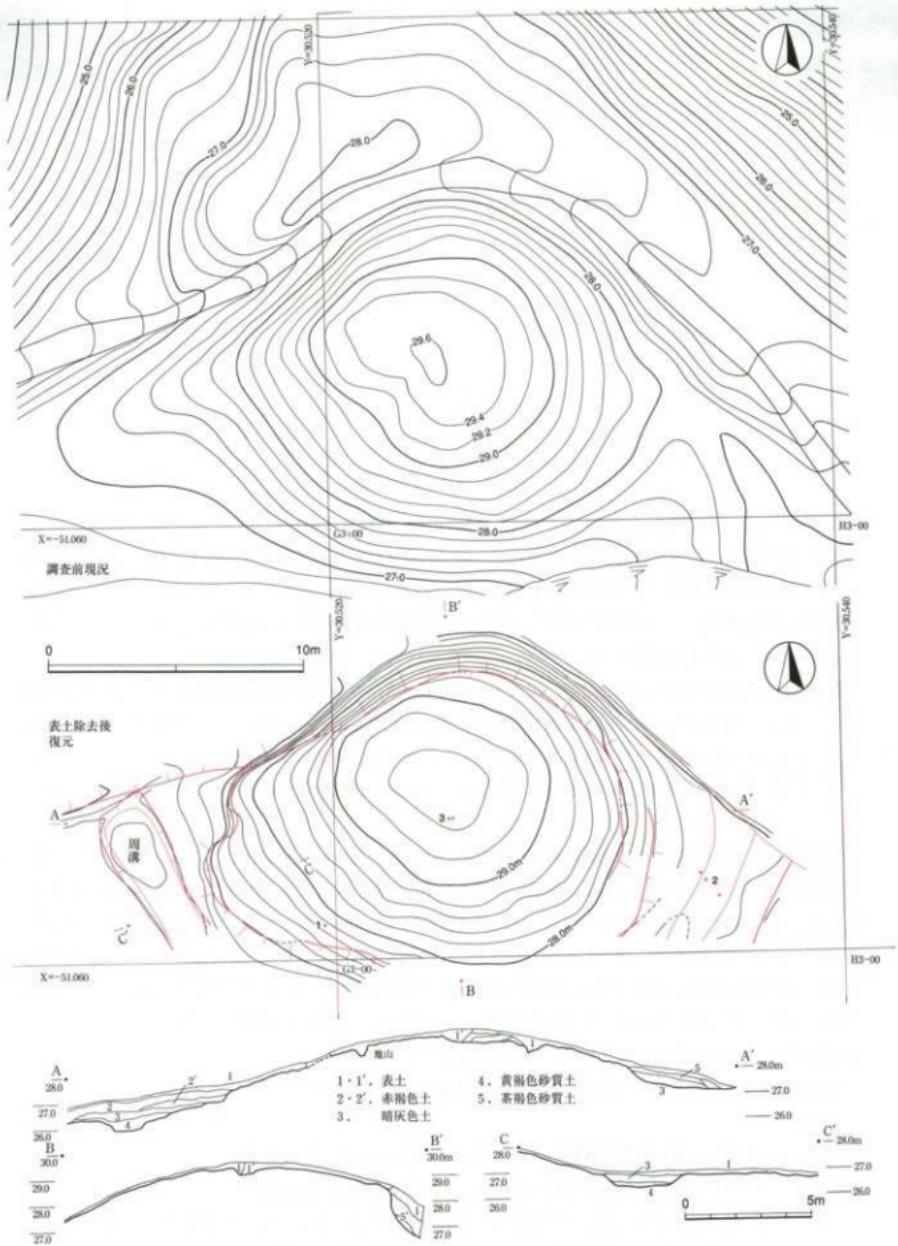
新旧にわたる盛土を除去したところ、塚の下から古墳の墳丘の一部と見られる盛土状の、暗灰褐色土が検出され、塚の外側にまで広がって分布していた。遺存した厚さは30cm～40cmで、塚の外側では20cm前後と浅く、その上に塚の盛土とは異なった土が堆積していた。塚の築成時に削平されたり、盛土されたりした土と見られる。盛土の遺存が悪いため、古墳の墳丘の盛り方の特徴を窺えるような状態は観察できなかった。

表土を排除したところ、塚のかなり外側にある、中心から約12mほど離れた地点で、本来の古墳を構築した際に掘り込まれたと見られる、周溝の一部を検出できた。検出できたのは塚の西側の部分で、長さ約6m、周溝幅は約3m、掘り込みは皿状で、深さは約70cm～80cmであった。塚の中心から同心円状に円弧を描くように認められた。同じく東側でも周溝の一部とみられるような窪みが確認されたが、それ以外の部分では明瞭な周溝は確認できず、両者から周溝を円形と復元すると、周溝の内径が約19.5m、外径が約25mの円墳として復元される。本来は円墳があったところに、近世にその墳丘を利用して出羽三山の供養塚を構築し、さらに昭和40年代に塚の補修をおこなったものであろう。

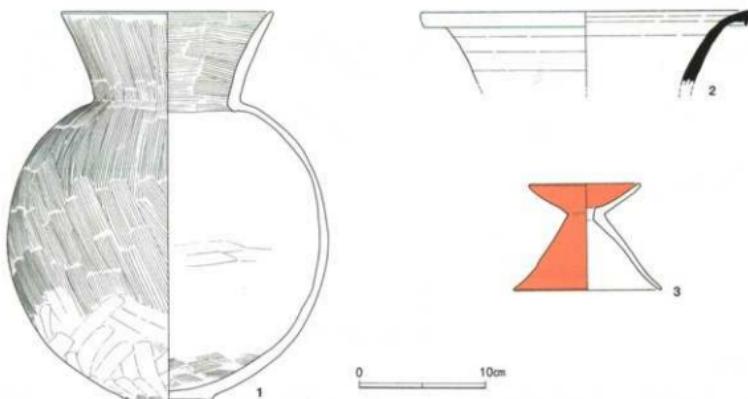
周溝内の掘り込みや土坑、主体部となるような遺構も検出できなかった。

②遺物

1は土師器の壺で、復元周溝の外側からまとめて出土している。復元口径14.3cm、底径7.8cm、器高31.1cmを測る。ほぼ球形の胴部と外反する折り返された口縁とからなり、口縁内面にはハケ後ナデで、ハケが一部残る。塚の築造時に外側へ排土と共に散乱したものだろうか。2は1と同様な壺の口縁で外面に折り返されている。外面には一部ハケが残るナデが施される。復元口径13.7cmとなる。



第15図 5号墳実測図・復元図



第16図 5号墳出土遺物

(5) 5号墳 (第15・16図、図版6~8)

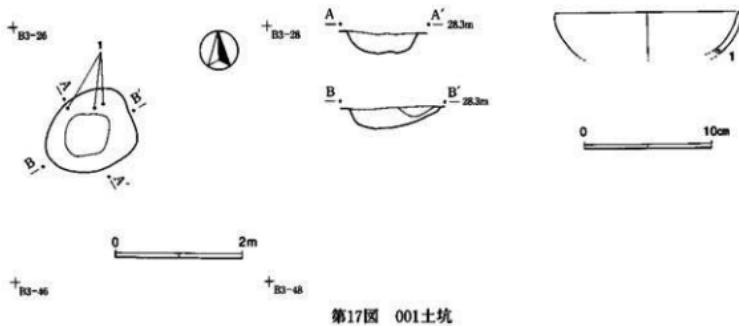
①遺構

平成8年度に調査を実施した古墳である。見かけは直径15m~20m程度で、高さ約2.5mの緩やかな墳丘の古墳である。北側には、山道が通り、墳丘の裾の遺存は良くないと思われた。調査前の表面観察では周囲に窪みは確認できず、やや平坦な部分がみられるのみで、そこが周溝の可能性を窺えた。墳頂の標高は29.6mで、直径4mほどのやや平坦な面を持ち、そこから墳丘はなだらかに下る。東側で約1.4m、西側で約2.4m下ると鞍部のようにいったん平坦な部分に至る。西側では墳長から約12mの距離、東側では約10mの距離である。

墳丘の表土を除去すると、すぐに地山が露呈し、盛土はほとんど検出できなかった。地山は、見かけの墳丘の傾斜に応じてなだらかに傾斜する。遺存している状況からは、ほとんど盛土をせず、あってもほんのわずかの墳丘しかなく、地山の掘り残しによって主たる墳丘を構築したものとみられる。墳丘裾と墳頂との比高差は東側で約1.3m、西側で約2mを測る。墳丘の東西側では、周溝とみられる溝が検出され、西側では、幅2.5mの細長い溝が、東側では幅5mのなだらかな傾斜の窪みが検出され、中には周溝覆土の堆積状況のように自然堆積の赤褐色土、暗灰色土、褐色の砂質土などが堆積していた。西側では幅が確認できなかったが、墳丘裾からなだらかに周溝が掘り込まれ、その中に細い溝状の掘り込みがされているように土層断面からみることが出来る。そうすると周溝幅は、約5m以上となり、周溝外側の立ち上がりは確認できなかったことになる。周溝の掘り込みの深さは、約0.7m~1mで、東側は墳丘裾部と周溝との間に、テラス状のやや平坦な空間が1mほど認められた。北側は山道によって大きく削られたらしく、0.8mほど下ると急激に傾斜を増し一旦落ち込み、そこから北側へ痩せ尾根状に台地が小さく突出する。

調査部分から本来の墳丘を想定すると、径約16mの墳丘をほとんど掘り残しによって作出され、その外側に幅約5m、深さ約1m前後の周溝が浅く掘り込まれていたものとみられる。形状は確定できない。

埋葬主体部や土坑は検出されず、検出できた狭い周溝範囲内にも土坑等の施設は検出されなかった。検出された遺物と、古墳の状態からは、前期の円形墳であったと思われる。立地も台地の突端の3号墳に統く、台地の尾根上の盛り上がりの部分で、比較的良い位置にあたるとみられる。



第17図 001土坑

②遺物

図示できる遺物は3点のみである。1, 3は土師器で、1は壺、復元口径16.5cm、底径6.7cm、器高30.9cmを測る。外面は折り返しの口縁から胴部までハケ、胴下部はハケ後ヘラケズリ、内面は口縁と底部近くにハケが施される。2は、須恵器のやや大振りの壺の口縁の破片で復元口径25.8cmとなる。3¹は器台で復元口径8.6cm、底径11.7cm、器高9.3cmを測る。全体に摩耗しており、脚部には穿孔ではなく、外面全面と、内面の器受け部には赤彩が施される。1, 2は周溝内、3は墳丘部分から出土している。2は周溝への流れ込みと見られる。

(6) 001土坑 (第17図、図版8)

①遺構

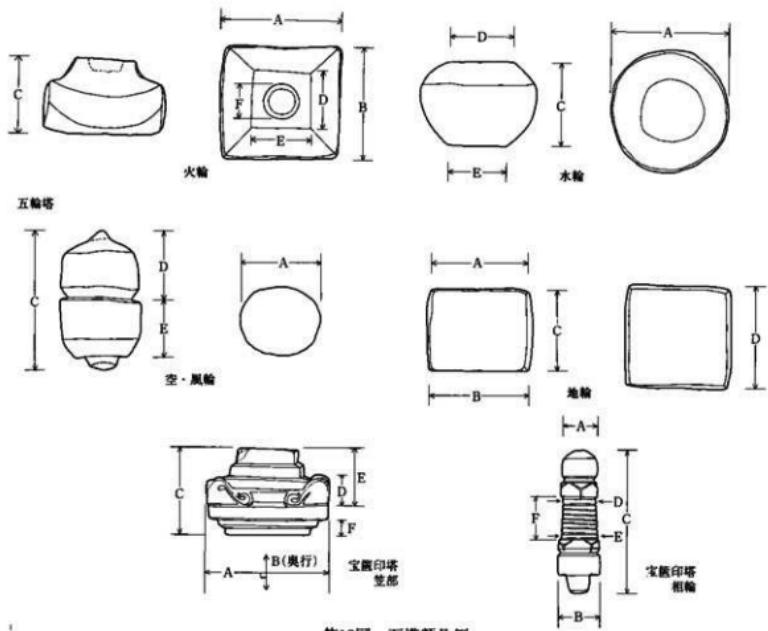
2号墳の墳丘下に相当する部分の地山に掘り込まれた土坑である。古墳旧表土を除去した段階で検出され、古墳構築以前に掘り込まれたものと見られる。平面形状はややいびつな円形で、北東-南西方向にやや長く1.5m、その直角方向は、1.2mを測る。掘り込みはなだらかで、やや深い皿状に掘り込まれている。深さは約0.35mである。覆土は地山の砂層に似た黄色の砂質土であった。形状・出土遺物からは、古墳の主体部とは考えがたく、土坑とみられる。

②遺物

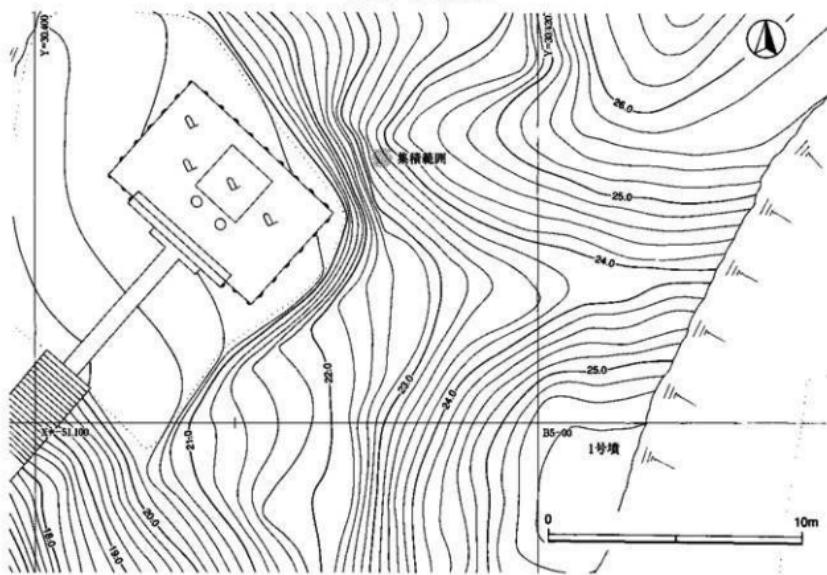
遺物は土師器の杯の破片が覆土上層から出土している。1は復元口径14.4cm、器高3.3cmとなる。器面は摩耗している。

(7) 石塔類 (第18~29図、図版8~11、第1~2表)

調査区の中で古墳に直接関連しない中世の石塔類が、1号墳の推定周溝の外側から集積して検出された。調査期間と調査区域との関係で石塔類の詳細な出土の把握は出来なかったが、出土状況の写真撮影と遺物の取り上げを行い、ここに実測図・計測表で紹介する。点数は、五輪塔の空風輪が11点、火輪が11点、水輪が12点、地輪が3点、宝鏡印塔の相輪部が1点、笠部が3点、板碑17点の計58点が数えられるが、各部の点数が比較的近いながら、本来の石塔としてうまく組み上げられる様なものがなかなか認められず、また板碑は破損した破片が非常に多かった。石材は五輪塔・宝鏡印塔類は、いわゆる安山岩製で、板碑はいわゆる綠泥片岩であるが、各個体で微妙に異なり、同一石材でのセットとは認めがたいものがほとんどであったことから、部分品として取り上げている。これらは石塔類の本来の出土状況とは考えられず、二次的な集積と考えられ、山林の開削の際に出土したものを、埋納もしくは自然に埋没したものと考えられる。板



第18図 石塔類凡例



第19図 石塔類集積範囲

第1表 石塔類 計測表(1)

番号	塔種	部分	A(cm)	B(cm)	C(cm)	D(cm)	E(cm)	F(cm)	笠部段数	遺存	重量(g)	その他
1	五輪塔	地輪	16.7	14.6	13.0	17.3				完形	7,420	
2	五輪塔	地輪	20.6	17.7	15.2	21.3				完形	13,085	
3	五輪塔	地輪	20.3	16.9	13.2	21.5				ほぼ完形	9,945	
4	五輪塔	水輪	24.3		16.5	12.2	11.5			完形	9,105	
5	五輪塔	水輪	20.1		13.7	10.8	10.3			完形	7,340	
6	五輪塔	水輪	20.8		13.8	10.9	9.9			完形	7,080	
7	五輪塔	水輪	20.0		12.0	10.1	12.3			完形	5,145	
8	五輪塔	水輪	20.2		14.3	11.2	10.3			完形	6,205	
9	五輪塔	水輪	18.7		14.5	7.6	10.4			完形	6,420	
10	五輪塔	水輪	18.6		11.7	10.1	10.4			完形	5,060	
11	五輪塔	木輪	19.4		13.8	10.6	8.4			完形	6,420	
12	五輪塔	木輪	20.6		15.3	10.3	9.2			完形	8,520	
13	五輪塔	木輪	17.2		10.7	9.0	9.3			完形	3,445	
14	五輪塔	木輪	18.0		13.2	8.7	8.9			ほぼ完形	5,375	
15	五輪塔	木輪	21.1		15.2	10.4	11.5			完形	8,250	
16	五輪塔	空・風輪	10.8		17.6	8.6	7.7			完形	2,560	
17	五輪塔	空・風輪	13.1		19.7	9.7	7.7			完形	3,150	
18	五輪塔	空・風輪	13.2		21.3	11.2	8.0			完形	3,860	
19	五輪塔	空・風輪	13.9		23.6	12.2	9.1			完形	5,370	
20	五輪塔	空・風輪	11.7		20.6	10.0	8.0			完形	2,496	
21	五輪塔	空・風輪	11.8		20.5	10.7	8.0			完形	3,046	
22	五輪塔	空・風輪	11.9		20.1	9.5	8.1			完形	3,430	
23	五輪塔	空・風輪	12.7		21.8	10.3	9.3			完形	3,400	
24	五輪塔	空・風輪	10.9		20.4	10.4	7.1			完形	2,825	
25	五輪塔	空・風輪	11.9		20.0	10.2	7.4			完形	2,677	
26	五輪塔	空・風輪	10.8		17.6	8.6	7.6			ほぼ完形	1,712	
27	五輪塔	火輪	19.0	17.7	11.9	9.1	9.5	5.6		完形	5,295	
28	五輪塔	火輪	18.5	19.0	12.7	9.6	8.8	5.9		完形	5,650	
29	五輪塔	火輪	18.9	19.0	11.2	8.5	7.9	5.2		ほぼ完形	4,945	
30	五輪塔	火輪	21.3	21.3	12.8	9.9	9.9	6.0		完形	9,355	
31	五輪塔	火輪	20.2	20.3	13.2	10.1	9.8	6.4		完形	7,375	
32	五輪塔	火輪	19.3	18.4	12.4	9.5	9.9	5.6		ほぼ完形	6,760	
33	五輪塔	火輪	22.5	22.4	11.7	10.5	10.5	7.0		ほぼ完形	8,915	
34	五輪塔	火輪	20.9	21.9	14.0	不明	9.7	不明			7,460	
35	五輪塔	火輪	17.4	17.5	11.4	7.4	7.4	4.9		完形	4,630	
36	五輪塔	火輪	19.7	19.3	13.5	9.7	9.1	6.3		ほぼ完形	5,660	
37	五輪塔	火輪	20.1	20.1	14.2	9.6	8.7	5.9		完形	7,570	
38	宝瓶印塔	笠部	19.7	19.8	14.6	5.0	9.3	3.6	5	完形	6,780	
39	宝瓶印塔	笠部	24.5	24.5	16.9	6.0	11.5	3.2	4	ほぼ完形	8,445	
40	宝瓶印塔	笠部	24.9	23.9	16.0	7.1	10.2	3.3	4	完形	9,120	
41	宝瓶印塔	相輪	7.0	8.3	28.3	6.3	7.1	7.8		接合完形	2,006	8相輪

第2表 石塔類 計測表(2)

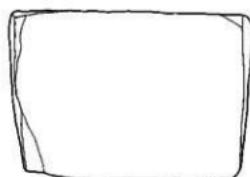
番号	種類	A(cm) 長さ	B(cm) 幅	C(cm) 厚さ	重量(g)	遺存	条線	種字	種字(副)		他刻	その他
									右	左		
42	板碑	(49.0)	21.4	2.1	4,820			キリ一ク				阿弥陀如来
43	板碑	(49.7)	24.4	2.3	4,280						サク?	勢至菩薩?
44	板碑	40.1	14.8	2.2	2,304	完形	2	キリ一ク				花瓶 三〇月日
45	板碑	(24.0)	17.2	2.2	1,842			キリ一ク?				阿弥陀如来?
46	板碑	(23.2)	16.8	2.3	1,229			キリ一ク?				阿弥陀如来?
47	板碑	(23.9)	14.5	1.8	1,277		2	キリ一ク			○〇月	阿弥陀如来
48	板碑	(45.7)	17.6	3.1	3,450							
49	板碑	(47.9)	18.7	3.1	3,820							
50	板碑	(14.3)	(14.6)	1.8	560						上?月日	
51	板碑	(17.8)	(13.4)	2.4	641				サ?			觀音菩薩?
52	板碑	(29.0)	(12.6)	3.0	1,648			キリ一ク?				阿弥陀如来?
53	板碑	(30.8)	(8.8)	1.6	673			?				?
54	板碑	(19.4)	20.2	2.4	1,797			キリ一ク?				阿弥陀如来?
55	板碑	(39.1)	21.2	2.4	3,995						二?日?	
56	板碑	(21.4)	15.7	1.8	1,038						花瓶	
57	板碑	(28.7)	16.7	2.0	1,739			キリ一ク?				阿弥陀如来?
58	板碑	(19.0)	(20.4)	2.2	876			キリ一ク?				阿弥陀如来?



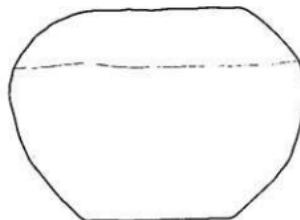
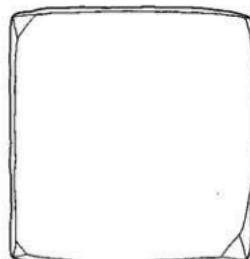
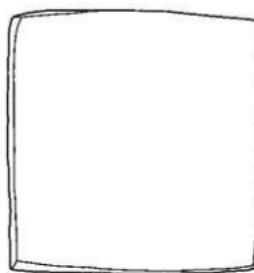
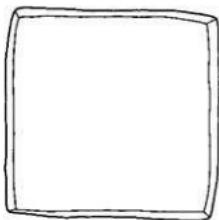
1



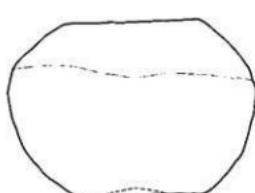
2



3



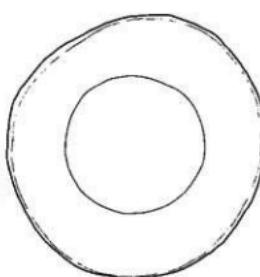
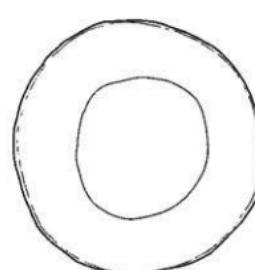
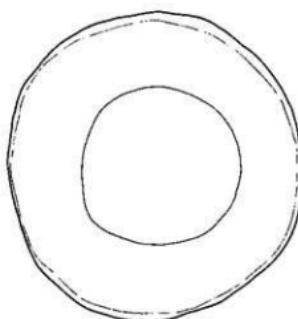
4



5

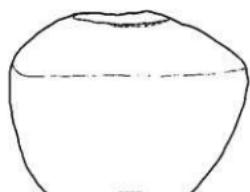
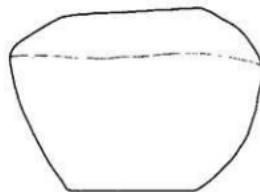


6



0 10cm

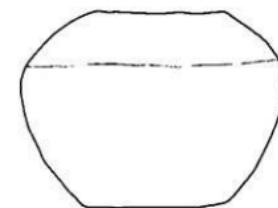
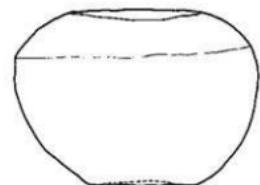
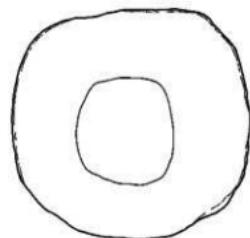
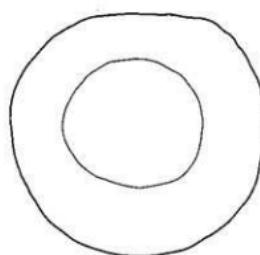
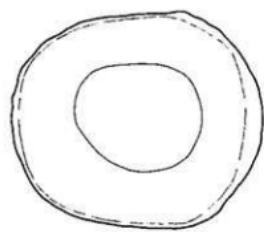
第20図 石塔類 (1)



7

8

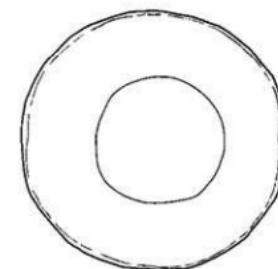
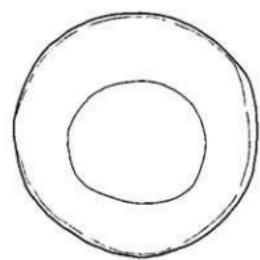
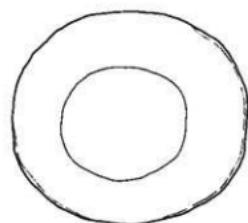
9



10

11

12



0 10cm

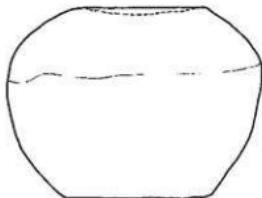
第21図 石塔類 (2)



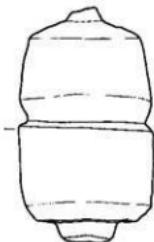
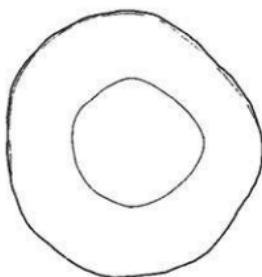
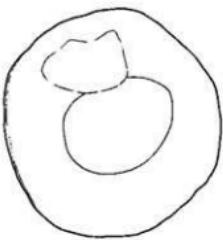
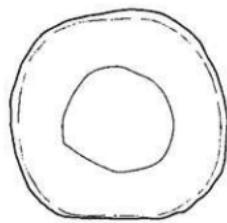
13



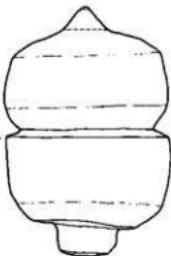
14



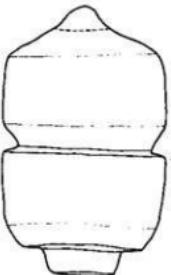
15



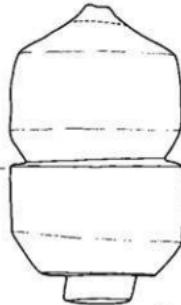
16



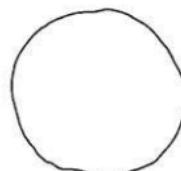
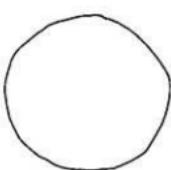
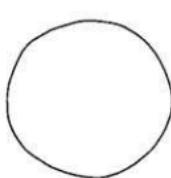
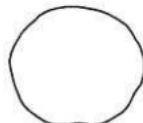
17



18

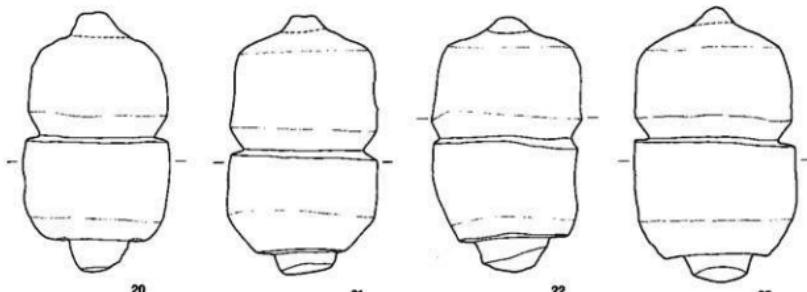


19



0 10cm

第22図 石塔類 (3)

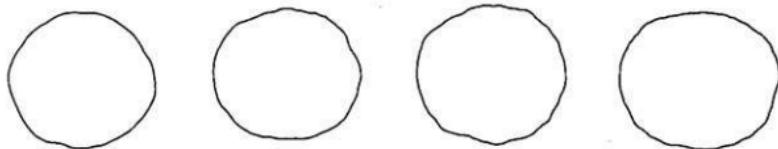


20

21

22

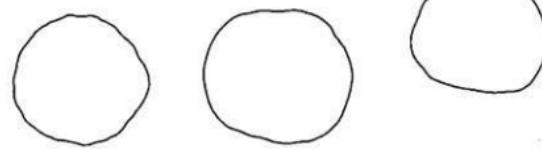
23



24

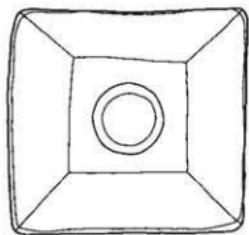
25

26

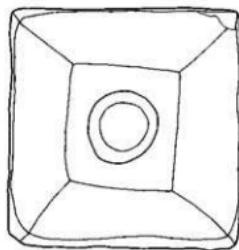


0 10cm

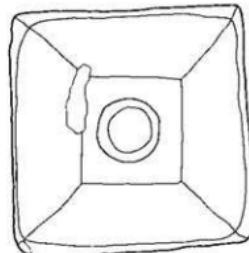
第23図 石塔燭（4）



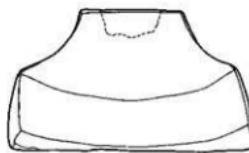
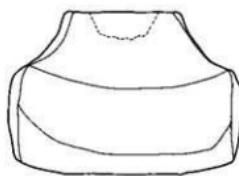
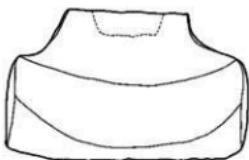
27



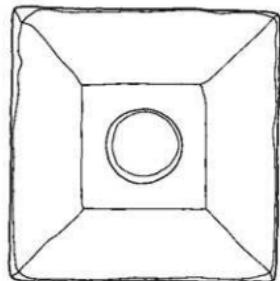
28



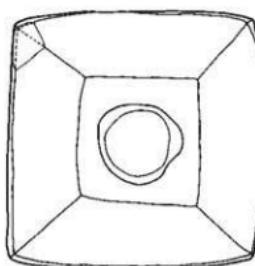
29



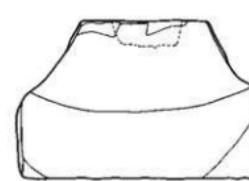
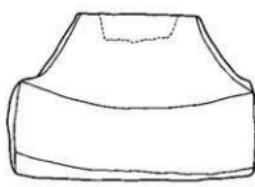
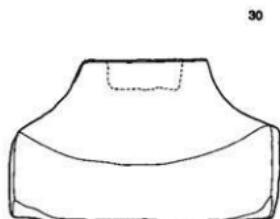
32



30

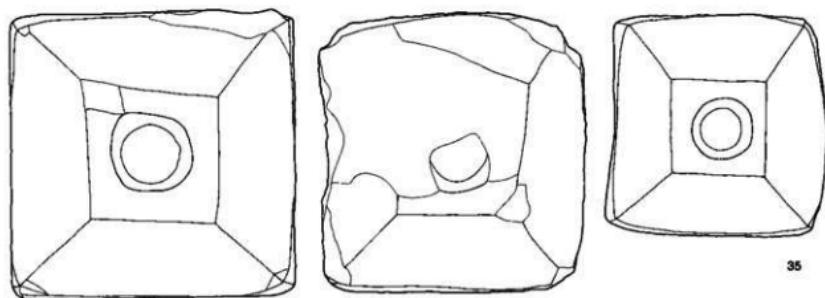


31



0 10cm

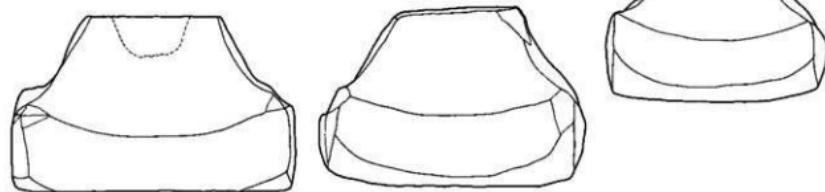
第24図 石塔類（5）



33

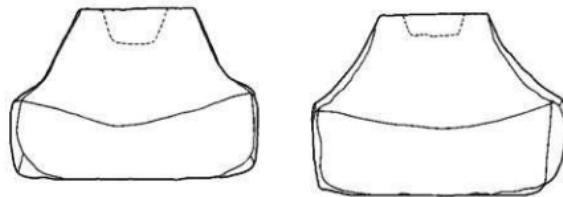
34

35



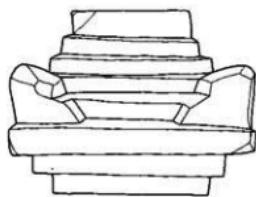
36

37

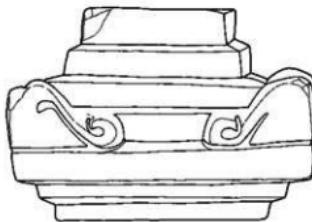


0 10cm

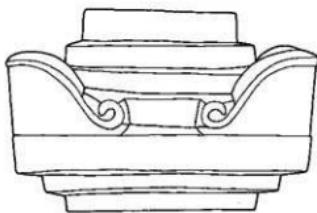
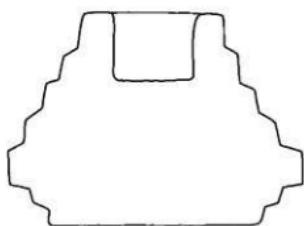
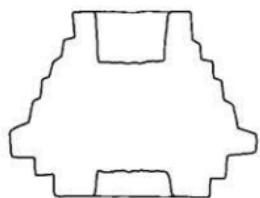
第25図 石塔頸 (6)



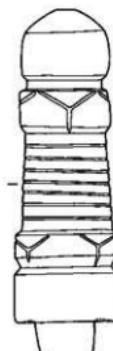
38



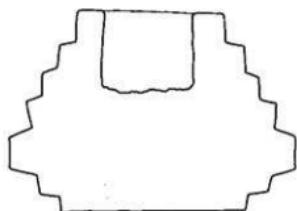
39



40

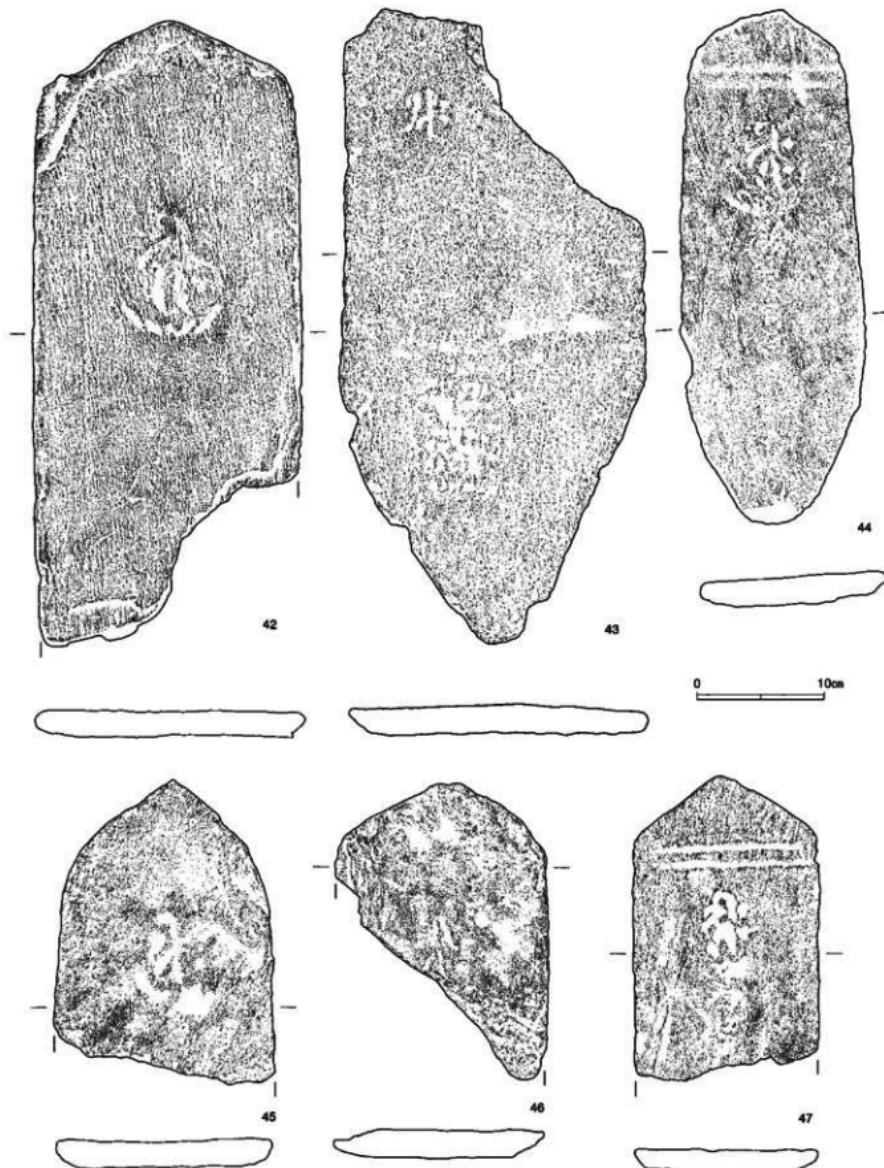


41

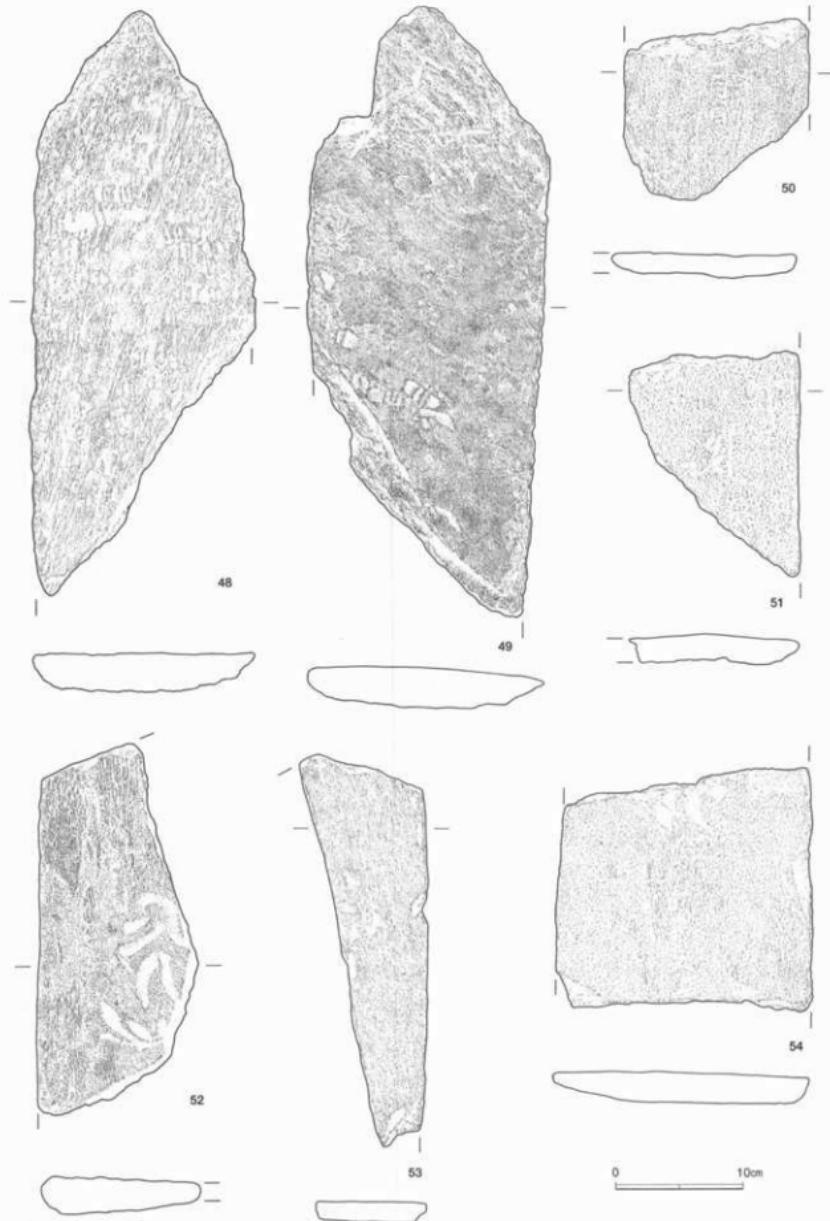


0 10cm

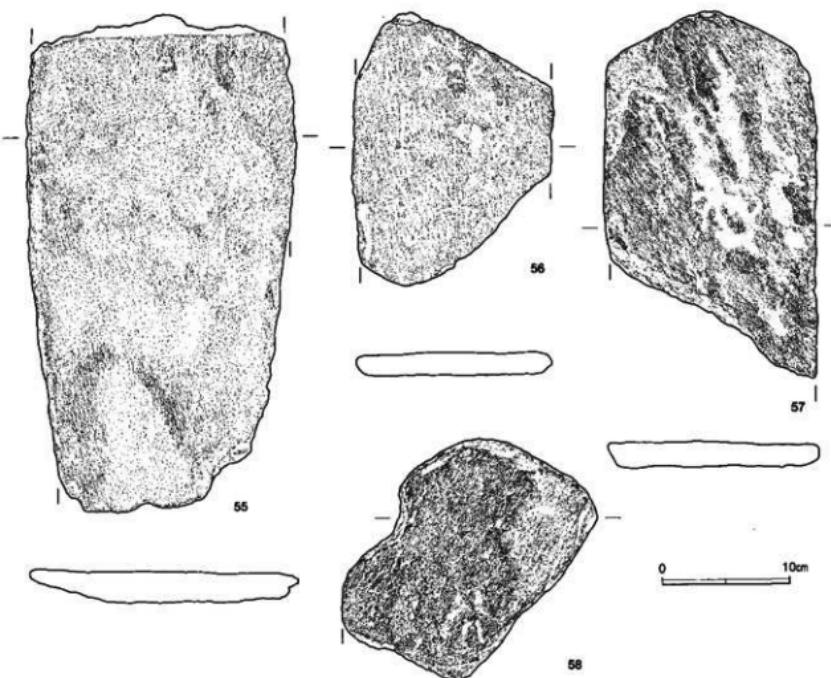
第26図 石塔類（7）



第27図 石塔類（8）



第28図 石塔類 (9)



第29図 石塔類 (10)

碑として図示したもの以外に緑泥片岩の破片が、多数出土しているが、板碑としての形状を窺うことが出来ないような破片であるので、ここには掲載しなかった。このことから見て板碑の個体数については、本来さらに多くの点数が存在したものと思われる。

注1 本遺物は、以下の刊行物に基準資料の一例として紹介されている。

勧千葉県文化財センター 2000 「研究紀要21 房総地方における前期古墳の展開－重要遺跡確認調査の成果と課題 4-」 18ページ、36ページ、44ページ

III 富岡古墳群B支群

1 概要（第30図）

先に述べたように、B支群は造成工事中に確認された古墳2基からなっている。工事中の新発見のため周囲は造成による土取りがなされ、古墳周辺の遺存状況は良くなかった。墳丘と見られる部分に対し調査を実施したが、周囲はすでに削平されていた。調査の結果は、墳丘の盛土がほとんど遺存せず、表土を除去するとすぐに地山が露呈するというような状況で、周溝もほとんど検出できないような状況であった。そのため、古墳の墳形を確定することは困難で、遺存していた地山の傾斜と土層観察から、古墳として地山整形削り出しの墳丘が造成されたことを想定するしか出来なかった。

2 遺構・遺物

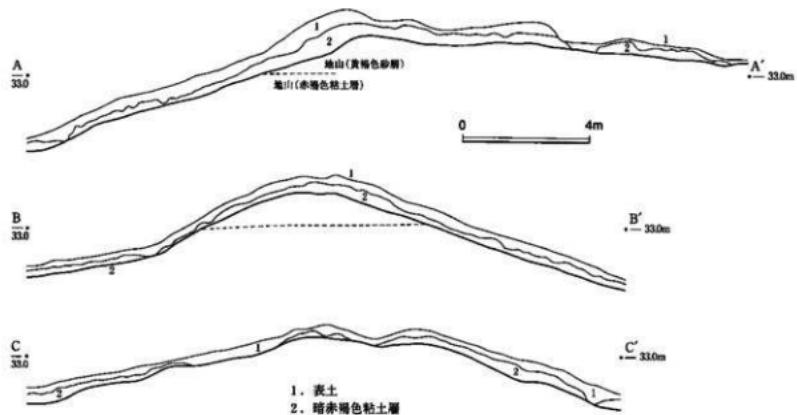
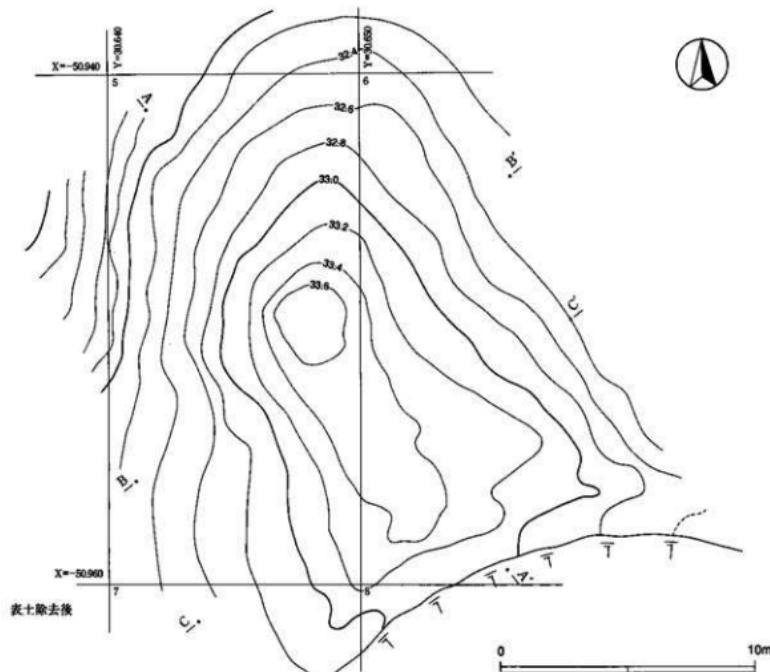
（1）1号墳（第31図、図版12）

①遺構

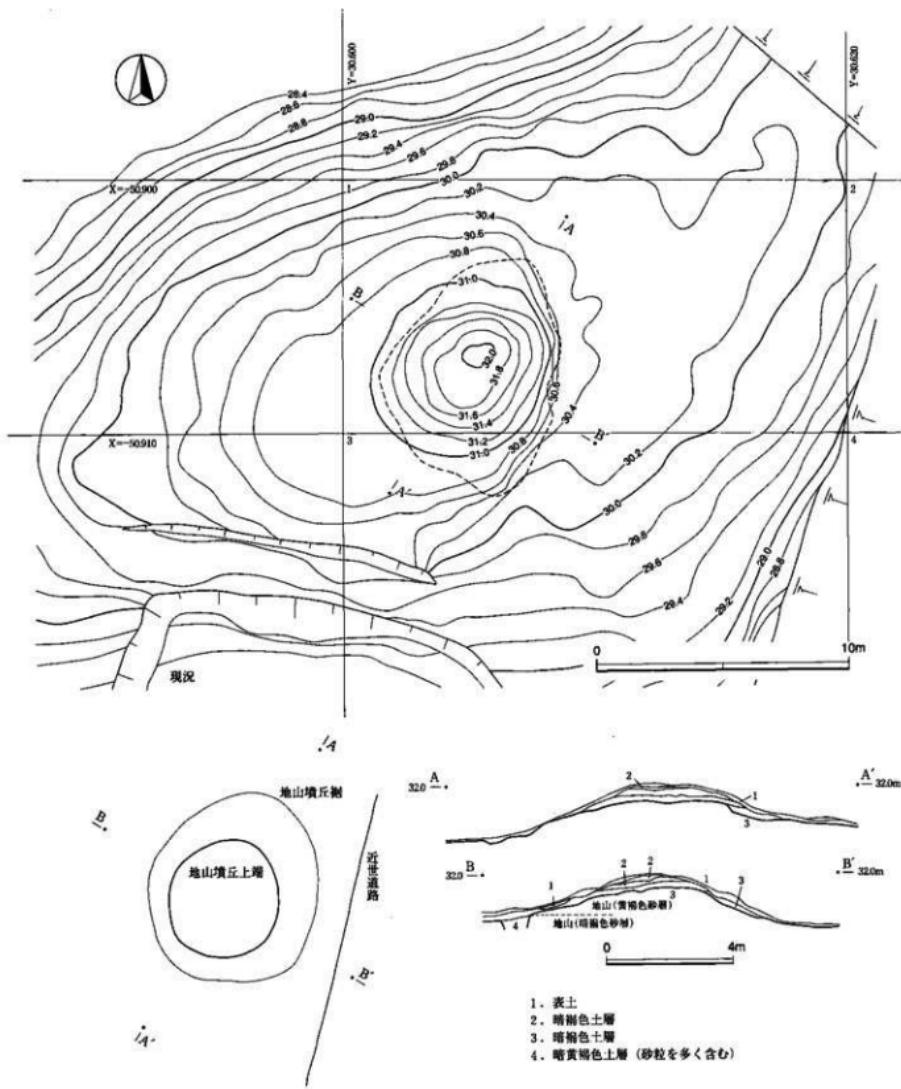
調査着手前の墳丘と見られる部分の観察では、北西-南東に長軸を持ち、北西側が後円部でそこから大きく広がるなどらかな前方部が南東方向へ盛土構築されているように観察されたことから、全長20m程の小型の前方後円墳の可能性を想定して主軸を想定し、それにはば直角に後円部と前方部に横方向の墳丘断



第30図 富岡古墳群B支群1号墳・2号墳周辺地形図



第31図 1号墳実測図



第32図 2号墳実測図

面となるように、土層観察用のベルトを設定した。周辺よりなだらかに盛り上がる表土を除去すると、深さ20cm～30cm程度で地山への漸移層が確認され、同様に20cm～30cmの深さで地山である粘性のある小礫を多く含む黄褐色砂層が検出された。地山は周辺の傾斜と同様で、特に傾斜の変換点も観察されず、最高地点の標高33.8mからなだらかに1mほど下り、そこから台地の崖面に至り急傾斜となって、遺存する範囲では約2.6mほど下っている。最高点周辺は、ややなだらかで平坦であるが、台地の瘦せ尾根上の平坦面を見ることが出来る。傾斜面では、古墳周溝に相当するような掘り込みや、区画溝のようなものは検出されなかった。現況から判断する限り、墳丘を削り出していると仮定しても円形の墳丘以外は想定することができないが、それすら積極的には認めがたい。

古墳の主体部と見られるような掘り込み、土坑は一切検出されなかった。

出土遺物のないことや、盛土墳丘や削り出し墳丘の痕跡が確認できなかったこと、区画の周溝の掘り込みも検出されなかったことから、古墳である積極的な証拠は検出されなかった。

②遺物

図示できるような遺物は、出土しなかった。

(2) 2号墳（第32図、図版12）

①遺構

調査着手前の観察では、低平な墳丘の円墳を想定し、墳頂にあたると見られる部分から土層観察用のベルトを十字に設定し、表土の除去を行った。表土は薄く、約10cmで盛土と思われる土層に至り、最大で約40cmの厚さを通して地山の黄褐色砂層に至る。盛土は地山の黄褐色砂層に近い砂質土で、ややしまりのない部分もあるが、ローム質土を含み自然堆積とは考え難く、人為的な盛土と思われる。盛土は平面的には、直径約5m前後の円形の部分に認められた。その部分の地山は周囲より20cm～30cmほど高く遺存し、一部には段差状に残っていることから、盛土によって地山が保護され遺存したものと考えられる。ただし、盛土構築の古墳に通常見られる、墳丘構築前の旧表土と判断できるような平坦で厚さの平均する典型的な黒色土ではなく、地山直上の盛土が暗褐色ながら最も黒色味が強く、それを旧表土と判断した。

②遺物

1号墳同様、図示できるような遺物は出土しなかった。

IV まとめ

1 古墳群について

今回の調査では計7基の古墳を調査したが、全般的に古墳の遺存状況は悪く、そのほとんどは墳丘が遺存せず、本来の墳丘は地山の掘り残しを主とした構築によったものとみられる。周溝も遺存状況が悪く、遺物も少なく、周溝内から少數の土器が出土したのみで、主体部を検出できたものはなかった。

富岡古墳群では5基の調査を実施し、遺存状況が悪い中で墳形・周溝の検出は困難で、3号墳を除いては形状復元するには資料が不十分な状況であった。個々の古墳をみると1号墳は南東側を半分削平されており、本来は円墳であったとみられる。2号墳も墳丘の直径10m弱の小型の円墳とみられる。3号墳は、西側半分を削平されていたが、周溝の検出状況から本来の形態は、方形墳であったと考えられ、周溝内の出土遺物からは、前期の古墳とみられる。4号墳は出羽三山塚として利用されてきており、本来は中期の円墳であったものを出羽三山の供養塚に改築したものとみられる。5号墳は盛土がほとんど遺存せず、地山の掘り残しによる前期の古墳で、墳形は不詳と考えられる。

富岡古墳群B支群では、古墳2基の調査を実施した。古墳としての遺存状況が極めて悪く、1号墳は古墳であることを積極的に認めるようなものは検出できなかった。2号墳は、旧表土の遺存から古墳であると判断したが、形状等を確定できるようなものは検出されなかった。

2 石塔類について

今回検出した石塔類は、五輪塔の部分37点、宝篋印塔の部分4点、板碑17点の計58点で、紀年名はなかったがすべて中世のものと見られる。写真による出土状況の観察によると、狭い範囲に多様な石塔類をぎっしり集積しており、板碑類は薄石を重ねるようにしてあり、場所をとらずにまとめたような状況で、五輪塔の各部分を組み上げたようなものは認められなかった。五輪塔については比較的各部の点数が近いものもあり（水輪12点、空・風輪11点、火輪11点）、石塔としての組み合わせを意識したが組み合わせられなかった。出土位置から考えると、1号墳西側の忠靈塔周辺を造成した際に、すでに散乱し埋没していた石塔類が検出され、それらを造成地よりさらに裏側の山林内に納めたような状況が窺われる。

中世の寺院の裏山には、当然といってよいほど墓地が営まれることが多く、そこには墓石を始め供養塔、小堂宇等が認められる例が多い。長徳寺も近世の村絵図には、比較的立派な伽藍が幾棟か描かれている¹⁾。長徳寺の裏山の墓域で、何らかの造成作業を行ったところ、石塔類が検出され、まとめて納置されたものと思われる。今回の調査範囲では、墓地遺構である墓坑や、火葬施設・区画整形等は検出されなかつたが、寺域の周辺には該当する施設が営まれていたと思われる。

注1 千葉市 1993 「絵にみる 国でよむ 千葉市図誌 上巻」に富岡村周辺の「椎名上郷」の村絵図が掲載されておりそれを参考にした。

写 真 図 版

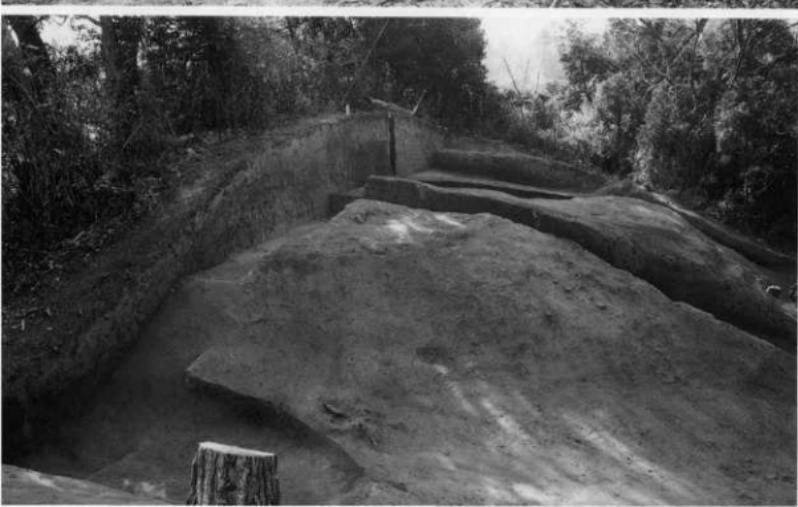




1号墳調査前



1号墳全景



1号墳土層断面



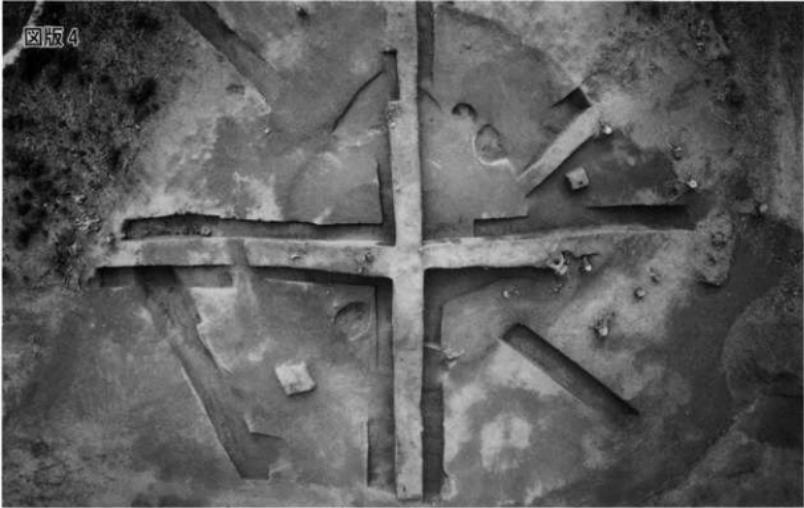
1号墳航空写真



2号墳調査前



2号墳土層断面



2号墳航空写真



3号墳調査前



3号墳土層断面



3号墳航空写真



4号墳調査前
(出羽三山供養塚)



4号墳調査前
(石碑類撤去後)

図版 6



4号墳土層断面



4号墳航空写真



5号墳調査前



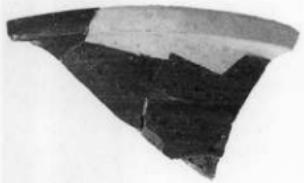
5号墳全景



5号墳全景



1号墳・2号墳・
3号墳・4号墳
全景

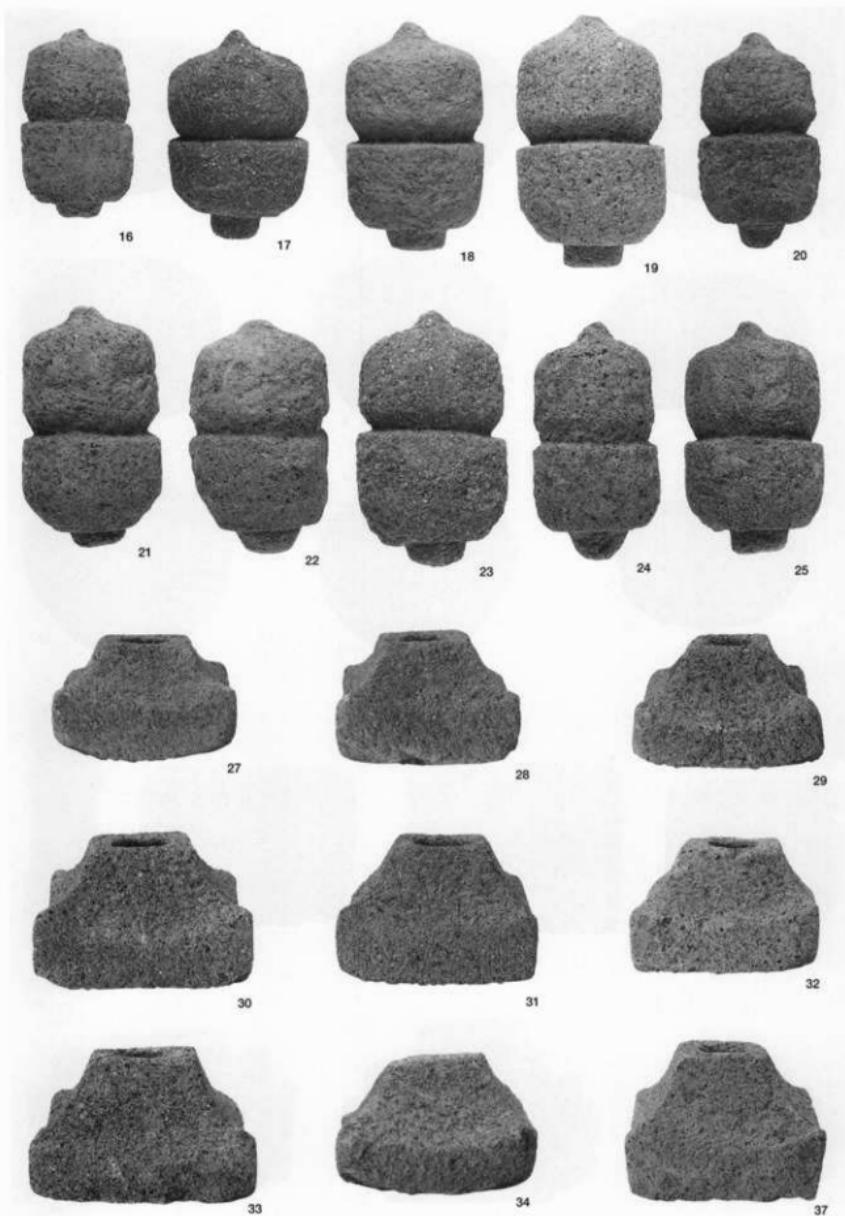


石塔類出土
状況

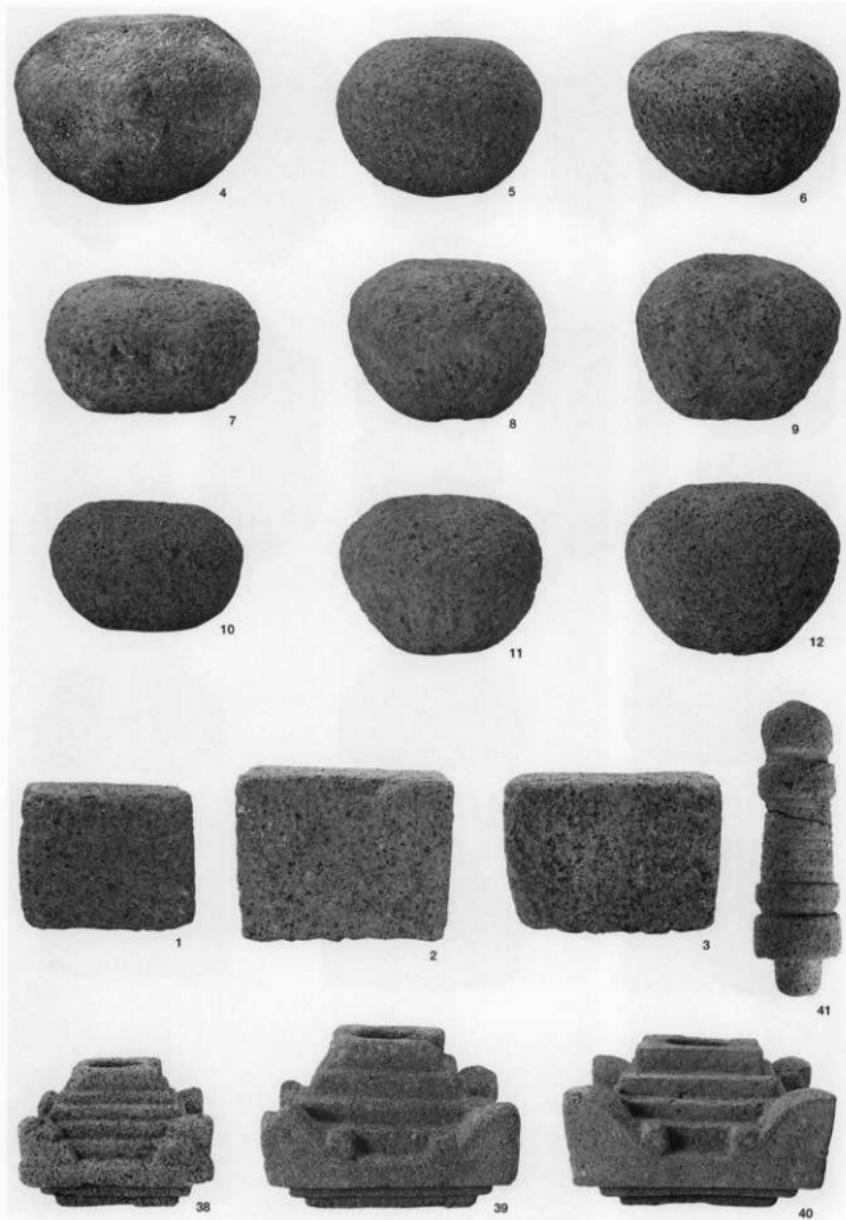


001-1

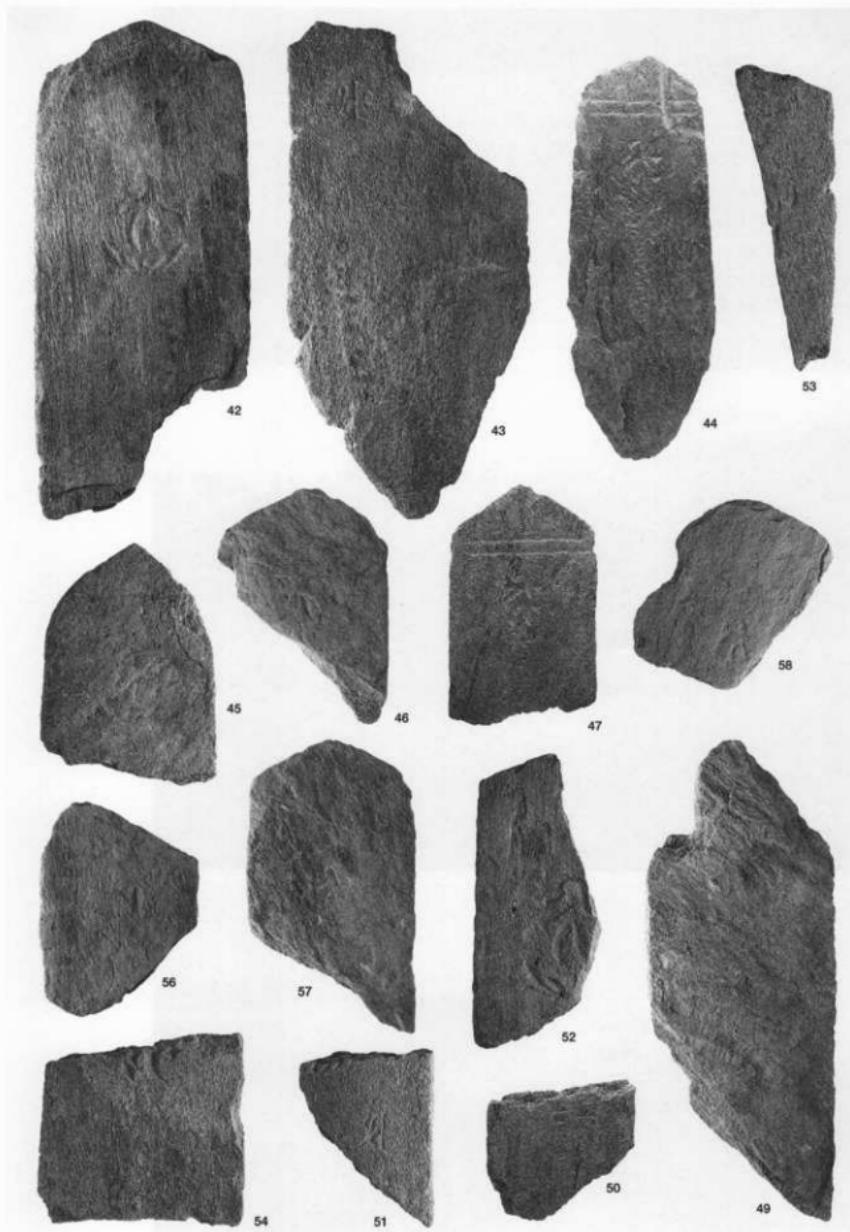
出土遺物、石塔類出土状況



石塔類（1）



石塔類（2）



石塔類（3）



報告書抄録

ふりがな	ちばとうなんぶにゅーたうん24
書名	千葉東南部ニュータウン24
副書名	千葉市富岡古墳群・富岡古墳群B支群
卷次	24
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第420集
編著者名	加藤正信
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2番地 TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦2002年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
富岡古墳群	千葉県千葉市 緑区富岡町181 ほか	12201	117	35° 32' 22"	140° 10' 10"	19961101~ 19970122 19980901~ 19981225	6,700m ² 古墳5基	土地区画整 理事業に伴 う事前調査
		12201	122	35° 32' 27"	140° 10' 18"	19970908~ 19971021	1,200m ² 古墳2基	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
富岡古墳群	古墳群	古墳時代	古墳 土坑	5基 1基	土師器・須恵器	
		中世	なし		石塔類（五輪塔・宝篋印塔・板碑）	
富岡古墳群 B支群	古墳群	古墳時代	古墳	2基	なし	

千葉県文化財センター調査報告第420集

千葉東南部ニュータウン24

—千葉市富岡古墳群・富岡古墳群B支群—

平成14年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 都市基盤整備公社
千葉地域支社

千葉市美浜区中漸一丁目3番地

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町1-10-6
